

文樂座人形浄瑠璃

花形競演の
四月特別興行



文樂座 四ッ橋

乍憚口上

花は佳し柳の風に香こぼるゝ今日此頃皆々様のお晴やかな御機嫌を祝福申上げます。文樂を護れ!!の況き篤き御聲援と御激勵に彌々健歩、丑年第四陣を確固不拔の精進を競ふ花形連が「文樂の陽春」を謳歌すべく起りました狂言の儀も寔に忠孝道の極致、世界の華と謳はるゝ「大楠公」を鶴澤友次郎獨自の脚色、新作曲に依り御觀賞を仰ぐと共に更に名だゝる傑作「戀女房染分手綱」「ひらかな盛衰記」「攝州合邦辻」「戀飛脚大和往來」を配列、春宵一夕の宴に供さんとするもの演出者の熱と潑刺さを御ひみきに何卒絶大なる御後援の程只管御願申上ます。

月 日

四ツ橋

文樂座 敬白

昭和十二年四月二日初日

初日に限り 午後三時開演
毎 日 午後三時半開演

・御 觀 覽 料 ・

一等席 御一名 金 一圓八十錢

(座席、椅子席共)

二等席 御一名 金 一圓

圓

三等席 御一名 金 五十錢

一等御座席(は五日前より
一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南⑤四七一一番

專用電話 南⑤三〇三二番

一般御用 南⑤三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります



花形競演の

文樂座

人形淨瑠璃

初日 午後三時開演
毎日 午後三時半開演

戀女房染分手綱
 ひらかな盛衰記
 大楠公
 攝州合邦辻
 梅川戀飛脚大和往來
 忠兵衛

道中双六の段より
重の井子別の段まで

三時三十分—四時三十五分
(幕間十分)

右衛門逆總の段

四時四十五分—五時五十五分
(幕間十五分)

櫻井露訣別の段より
持佛堂訓戒の段まで

六時十分—七時二十分
(幕間十五分)

合邦 住家の段

七時三十五分—九時十分
(幕間十分)

新口村の段

九時二十分—十時十分
(打出し)



花形



こひによろほせめわけたつな
戀女房染分手綱

道中双六の段

道中双六の段
 重の井子別の段

竹本陸路太夫
 竹本播路太夫
 竹本常子太夫
 竹本松島太夫
 豊本相瀬太夫
 鶴澤寛友平
 鶴澤喜代之助
 鶴澤清友
 野鶴澤吉藏
 野鶴澤吉藏

人形

乳母重の井
 調元お福
 こし元お福
 本田彌三左衛門
 馬方三吉
 踊り子
 吉田文五郎
 吉田文枝
 吉田光之助
 吉田玉藏
 桐田玉司
 吉田玉昇
 吉田玉昇

この淨瑠璃は寶曆元年二月竹本座に掛けられたのが始めて全十三段から成立つてゐます。この段は十段目で双六の段であるが重の井子別れで通つてゐます。作者は吉田冠子、三好松洛であります。この曲は大近松の「待夜小室節」(丹波興作)を改作したものであります。書下しの時は竹本大隅掾が語つてゐます。この子別れの段の趣向は丹波の藩主由留木家の家老伊達與三兵衛の伴與作が竹村定之進の娘重の井と通じて與之助といふ子供を生けたが、悪者の讒言で

二
 故國を走り、馬追に零落します。重の井は再び主家へ歸參が叶ひ、乳人となつて姫君のお供で江戸へ發足しやうとして、姫君のお遊びにと呼入れた馬士が意外にも一子の與之助であつたので、一旦は親子の名乗をしたが、世間體を恥ぢて、涙を隠して杖を別つといふ筋であります。歌舞伎にも上演されて有名なものです。

(床本) **道中双六の段**

たつ年月も迫り來て由留木殿のお湯殿子調の姫早十二歳に成賜へば兼ての約束にて東の高家入間殿へ御婚禮極り蕾から取る花嫁御けふ旅立の御供揃へ上下ざとめき賑はへり。刻限は巳の上刻との定めにて御迎ひのおも家老本田彌三左衛門數獻の盃

足もととはよろ／＼と猩々緋の道中羽織白い所は髪斗りきんかあたまに顔色もしゆちんの立付けりしげに何と／＼お供廻りが揃つたらお先手から乗出し召れ目出度折からと申し殊に女中のお供だ。少しの事は見遁しにして置召され、あつとこたへてさやりやう共サア御立と催す所に奥より女中聲々にマ、待つしやれ／＼氣の毒やお姫様關東へいく事はいやじや／＼とやんちや斗り御意なされお袋様も殿様もたらしつしかつゝ遊ばさ共どふでもいやじやおむつかりお乳の人の重の井殿色々と申されても夫程江戸へいきたくば乳母斗りいきおれとお乳の人の脊中をとん／＼とぶたしやんして御機嫌がそこねましたといふところへ眉泣はがし姫君

は江戸も東もこちやいやじやおれはいかぬと泣く／＼走り出で賜へば武士衆も下々も御門にかけ出で家老の外男ぎれこそなかりけれ、お乳の人色をかへコレ申お姫様下々の子供さへ九ツ十では物のきゝわけござります、江戸へござれば入る間殿の惣領嫁御とかしづかれるお身ぢやぞやお乳の育ての難になれば女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬサアよいお子じやお興にめせとおどしてもそやしてもいや／＼皆のだましぢやなんの東がよい所こしもと共がうたふを聞きやサアみんな愛へ出ていつもの歌をうたへ／＼とせめ賜へばおとぎ小姓のぐわんぜんし十二三なが手をそろへ山も見へざるかりそめに江戸三界へいかんしていつ戻らんす事

じややら殺して置いていかんせのはなちはやらじと泣き、ければアおきや／＼お大名の宮仕へ琴の歌でも謡はいで誰に習ふて端手な歌姫君などにおしやんな必ず置いて貰ふとお乳の人の不機嫌さ本田もあまり詮方なく申お姫様あれは人の口てんがふ花のお江戸は京まさり淺草上野の花盛り又さかい町木挽町のでんつく／＼でこの坊をいやつととゝゝゝいなどゝ切合を見せましょ道中の面白い事富士の山と申す天造とゞく山を御目にかけまする先年身共が御結納の御使者に參つた時はお姫様はまだ二つ何卒御婚禮のお迎ひに參りたいと申たが光陰矢の如しと今年丁度十一年其様にやんちやおつしやるまで長生を致さそとは存ぜんんだ、早お興に

召ませせいと力一ばいすかしてもい
 やく江戸へはいきはせぬどうでも
 いやじやと泣賜へばお乳と今はあく
 みはてどふしてよからふ御家老もあ
 きれてこそはいたりけれお中居の若
 菜は門外より走り入りナ、お乳の人
 様おもしろい事がござります十斗
 りのそりさげのちつぼけな馬方が道
 中双六とやら東海道の繪をひろげあ
 ちな事して遊びます御機嫌直しにお
 目かけなされませヲ、よふぞ氣が
 付た夫は聞き及んだ道中の繪を見せ
 ましお心もうつる爲馬士でも子供は
 大事ないお赦しちや其丁稚に持て參
 れといふておじや心得ましたと御門
 に出連立來る馬方が片肌ぬいでさは
 き髪御前近くも不遠慮に襟先に揚足
 してヤレくくあか様達はあつた

ぼこしゆもないほふばい共とかけど
 く道中双六打つてくつの錢程しと
 こませうと思ふたに人呼迫つて何で
 やる、ハレヤレくくきりく乗
 つしやれ馬やろいとぞつかふどなる
 扱てりかうな野良じやな船頭馬かた
 お乳の人ふちもそちらと同じ事シテ
 年はいくつ名は何といふぞ年は今年
 十一五つの年から馬おふて一代若衆
 に成らずにはへぬさの念者じや所で
 名はじねんじよの三吉といひやんす
 さてもよい名じや聞けば道中双六が
 有るげな腰元衆も打て見や姫様も遊
 ばせサア三吉も愛へこい苦しうない
 と呼ればあいといふより慮外をも
 返り短かききせるの煙立まじりたる
 女中の傍そぐはぬ様に見へざるはさ
 すが童の一徳と繪を取出し双六をみ

な打交り遊はるゝこれく御らんせ
 うたしやんせ、是こそ五十三次を居
 ながらあゆむひざ膝栗毛馬はいしい
 道中すど六なむ諸佛ふんしんと書い
 た六字を六角のさいは櫻木花のみや
 こをまん中に思ひくの印を置いて
 さらばこちから打出の濱大津へ三里
 委でやばせの船賃が出舟召せくた
 び人の乗おくれじとゞさ草津お姫様
 より先づ姥が餅一口二タ口みな口
 どぢやう踊りこゑ坂へこすのもさい
 次第さいをふれ振るくやすどか
 を後にさがればまけまいとせきにせ
 きより龜山にたばこ火うち石やく
 しおつとくは名の舟渡し所々の名物
 かふておあしつくく突手まり子に
 ひいふう三いよ府中杖尻にすつと
 とんくんと打つたる沖津波松原晴
 る膏薬かふて月。

重の井子別の段

竹本 伊達太夫

鶴澤 友次郎

人形

乳母重の井 吉田文五郎

馬方三吉 桐竹紋司

調 姫 吉田文枝

こし元お福 吉田光之助

本田彌三左衛門 吉田玉藏

宰 領 吉田玉徳

宰 領 吉田多三郎

をすひ出せきよみ寺由井蒲原や吉原の花の蒲焼名物の鰻の肌へ沼津の宿三嶋こゆれば箱根へ三里さいめしだ
 い關こゆる悪いめうでは手はんを取に元の京へ立歸るがつてんかヲ、のみこんだ小田原うゐらふ大磯平塚藤澤のさはともなしに双六のさいさきもよし門出よし道中早めてとつかは
 といそぐ程が谷神奈川越エ川崎を越エ品川こへまつ先がけのお姫様一ばんがちに勝つ色の花のお江戸につき賜ふ一のうらは双六の幸有り悦び有りなぐさみ有ける道中とどつと興にぞ入賜ふ。

(床本) 重の井子別の段

傍の衆にはやされて、稚心の姫君。かうおもしろい東とは、今迄

おれは知らなんだ、サア〜行かう早やいかう。ヤアござらうとおつしやるか、そりやめでたいわ〜、又もや御意の變らぬ間に、行列揃へと立ちさはぐ、お乳の人は勇みをなしそんならま一度、大殿様お袋様とお別盃これも、馬子殿おかげじや、でかした〜、そちには禮いふ、褒美やる、そこに待ちやムとさびめき渡り、奥にお供し入にけり、馬士はつひに見ぬ金の間をうそそと、覗き廻れど庭の外、踏もならはぬ備後表詞エ、此座敷はぎやうにすべつて歩かれぬ、大名の家よりも、こつちの内がけつこうでござる、と獨言して居たりけり、お乳の人は大高に、菓子さま〜文庫にもり入れ。詞どれどれ三吉、そこにかそちは健氣者じや

道中双六お目にかけ、それ故に姫君様、お江戸へござろと御意なさるゝお上にも御機嫌、是は御前のお菓子有難ういたゞきや、お錢三筋、買いたい物買やゝ殊にそちは通しじやげな、道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に逢はふと云や、見れば見るほどよい子やちに、馬士させる親の身は、よくくであらうといと懇の詞のすゑ三吉つくく聞きすまし。詞由留木殿の御内お乳の人の重の井様とはお前かそんなりやおれが母様と、抱き付けば。ア、これは慮外な、詞俺が母様とは馬士の子は持たぬ、ともぎ放せば、武者ぶり付き引退くれば絶り付き。詞何んのな

與作、其の子は私、こな様の腹から出た與之助はわしじやわいの父様は殿様のお氣にちがふて、國をお出でなされたは、小さい時で覺えねど、沓掛の乳母が話には、詞母様も離別とやらで、殿様に御奉公、こなたは乳母が養育し、父さんに逢はせたら思へ共、甲斐もない、母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、重の井さまと尋ねよと懇にをしへて乳母はおれが五つの年、久しう痰を患ふて鳥羽の祭の餅が咽につまつたやら、つひ死んでのけました詞乳母の子の一平は父様を尋ねに行き、在所の衆が養ふて漸々馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする、コレ守袋を見やしやんせ、何んの嘘を申しませう、お前

の子に紛れない外に望みは何にもない、父様を尋ね出し一日なりとも三人一緒に居て下され見事沓も打ちます、此草鞋もわしが作つた、晝は馬を追ふて、夜は沓打、草鞋、つくり、父様母様養ひませう、父様と一緒に居て下され拜みまする母様と、取つき抱きつき泣き居たり。お乳ははつと氣も亂れ見れば見る程我子の與之助、守り袋も覺えあり、飛び付いて懐に抱き入れたく氣はせけども、アツア大事の御奉公、養ひ君のお名の理、偽はつて呵らふか、イヤ可愛げにさうもなるまい、マアちつと抱きたい、ア、どうせうと百千色の愛涙、二つの目にはたもちかね、むせび沈みて居たりしが、いやく我子ながらもさかしい者、偽つても

眞とせず母を心のきたない者と蔑し
まるゝも情なし譚を語つて合點させ
恥しめてかへさんものと涙拭ふて氣
をしづめ、愛へ來い與之助と引寄せ
て兩手を取り、詞扱も大きうなりや
つたの、とても成人せうならば侍
らしうなせ尋常にも育たぬぞ、顔の
道具手足まで母はかうは産み付けぬ
美しい黒髪を此やうに剃りさげて、
手足は山のこけ猿じや、ほんに氏よ
り育ちぞと、又さめんと泣きける
が詞コレ物をよう合點しや、腹から
産んだは産んだれども今では子でも
母でもない、淺ましう成下つたを、
嫌ふていふではさら／＼ない、愛の
譚をよう聞きや、詞母はもと御前様
の御奉公人與作殿は奥家老のお子息
たがひに若木の戀風に、すれつもつ

れつ、一夜が二夜と度重なり、そな
たを懐胎此の事御上へ聞へては、父
も母も御成敗にあふ故に、詞病氣と
偽り乳母が所で産落し、育て貰ふ其
中に、情なや八平次といふ者の所爲
にて父様は御追放、此母が愠氣から
不義の事あらはれ既に御成敗に極り
しを、わしが爲には父様、そなたの
爲には祖父様の定之進様、勿體ない
わしにかはつての御切腹、お姫様の
乳ばなれといひ立て此のお家敷へ奉
公、世が世なれば奥家老の御子息、
二番と下座にさがらぬ人、其時母も
一緒に退けば、もつとも夫婦の道は
立てども、目に餘つたお家の御恩、
誰何時の世に報ぜん、残つて恩を報
じてくれと、父様の斷り故、第一は
男のため、夫婦の義理を忠義にかへ

て、飽かぬ離別をしたわいの、詞をき
の子は幼うても、御勘氣の末氣づか
ひな、與作が子とばしいやんなや、
サア早う御門へ出や、いかなる因果
な産れ性、現在我子に馬追させ、男
の行衛も知らぬ身が、母は衣裳を着
飾つて、お乳の人やお局よと、玉の
興に乗つたとて、是が何になること
と聲を忍びて泣くばかり、子は生れ
つき賢くて、聞きわけある程猶泣入
り悲しい話を聞きました。さりなが
ら常に乳母が申したは、乳兄弟の事
なれば、母様にさへ逢ふたらば、父
様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ
てくだされかしと、いへばちやつと
口をおさへ。アレ／＼勿體ない、詞
其乳兄弟は言はぬ事、姫君様の關東
へ養子嫁子にお下り、高いもひくい

も姫ごぜは大事の物先は他人の世間體、三吉といふ馬追が、乳兄弟に有るなど、どう妨げにならうやら、穢の穴から堀も崩る、輕いやうでも重い事もそゝいふて人も聞く、先づ早う出てくれと、泣くゝいへば三吉。詞ア、母様あんまり遠慮過ぎました、先づ言ふて見て下され、また言をるか開かない、夫の事我子の事母に如才があるものか、合點のわるい開分けないと制する中に奥よりも詞お乳の人、どこにぞ御前から召しますと呼ばれば、アレ聞きや、人がくる出たもと手を取つて引出だす不憫や三吉しくゝ涙頬冠りして目をかくし、沓見まつて腰につけ、見すばらしげな後影コリヤま一度こちらむきや、山川で怪我しやんな雨

風雪ふり夜道には腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩らはぬ様にしてたも、毒な物くはずに腹痲疹の用心しや、可愛の形やいたゝしや、千三百石の代取が、何の罰ぞ咎めぞと、式臺の段階子に身を投げ伏して歎きしが懐中の有合ふ一步十三、巾紗に包み是嗜みに持つて居やと、涙ながらに渡さるゝ。三吉見かへり恨しげに母でも子でもないならば病うと死なうと要らぬお構ひ其一步もいらぬ馬士こそすれ伊達の興作が惣領じや母でもない、他人に金貰ふ筈がないエ、胴慾な母様覺えて居さつしやれと、わつと泣き出す其有様、母は魂消えりて、養君、お家の御恩思はずばさて一人子を手放して何のやらうぞ、奉公の身

の浅ましやと、もだえ焦れて歎きける時に奥口ざゝめいて、早御立と姫君の、御輿かき上げ行列立ち、お乳の人の乗物を、ひら付にこそかき寄せけれ、お乳はさあらぬ顔付して、姫君のお伽に、最前の馬士を此の乗物に引つけ、お慰みにうたはしや。畏つたと幸領ども。詞コリヤそくな、自然薯め調ひおらうとぎごつなく、詞ヤアこいつはほへるか、何じやこりやいまゝしいと、握拳二つ三つ、いたゞきなながら泣聲に、坂は照るゝ鈴鹿はくもる、間の土山雨が降る、降る雨よりも親子の涙中にしぐるゝ。



ひらかな盛衰記

逆艦の段

この浮瑠璃は元文四年竹本座で初演

松右衛門逆艦の段

竹本相生太夫
鶴澤道八
鶴澤呂太夫
豊竹呂太夫
鶴澤可夫

人形

親権四郎	桐竹門造
娘およし	桐竹政龜
船頭松右衛門	吉田榮三
實八樋口次郎兼光	桐竹紋十郎
こし元お筆	桐竹紋昇
棹槌松實ハ駒若君	吉田玉市
船頭富藏	吉田玉徳
船頭九郎作	桐竹紋太郎
船頭久八	

された文耕堂、三好松洛、浅田可啓、竹田小出雲、千前軒等の合作で『源平盛衰記』を軟かく脚色したもので全五段もの。三段目の切『逆艦』の段最も有名で、逆艦として今日遣したのは初演の竹本播摩少掾の功績に負ふところ大なるものがある。内容を申上げますと、

諸國を流浪し、大津の宿屋で梶原平三の家來番場の忠太といふ追手の者に襲はれたが同宿の巡禮権四郎の孫槌松が間違つて駒若の身替に捕はれて危く虎口を逃れた。

権四郎は攝州福島の船頭で婿の松右衛門は義仲四天王の一人樋口次郎兼光で、粟津の敗戦から姿を晦し、逆艦を覺へ義經を亡ばす企てから権四郎の婿となつてゐるものである。その陰謀も梶原に見現はされて捕手がかゝつたが畠山重忠の情で駒若は助けられ樋口次郎は繩にかゝるといふ壯重味溢れた中に情緒纏綿たる時代世話物であります。

(床本) 逆艦の段(中)

行く空の難波瀉あし火焚家の片庇、

家居には似ぬ里の名や福島の地はお
 してなべて世を海渡る船長の有が中に
 も權四郎とて年も六つを十かへりの
 松右衛門といふ通り名は養ひ俎に譲
 りやる門に目當の松一本所に蔓る親
 仁有、志す日に邊近所のと、嬢達お
 茶まるれとて招かれてナフ權四郎様
 けふは志の日じやお茶呑とおよし
 様の直にお使から共ない忝い誘ひ
 合せて參つたと、どや、内に入り
 れば、ヲ、よふこそ、けふは娘が
 前の連合此榎松めが本のと、が三年
 の祥月命日に當つた故、澁い茶を焚
 ました。呑でゆつくり仕て下され、
 常なら筈でも取せませす管なれど、知
 ての通り足弱な娘や孫を引連て順禮
 の長道中、物入の後何にもしませぬ
 とは言へ娘何ぞないか何ぞと申たら

人手はなし此子はせがむ、ほんの心
 ばかりをばあがつて御回向願みます
 と穀交りの煎豆に燭香持せて汲出せ
 ばム、もふ三年になりますか、ア、
 月日に關守すへざればじやの、今の
 松右衛門殿はござつて間もなくし
 り、付合ねば心入は知ぬが、死し
 やつた此榎松の親御は恰度此人參の
 太煎の様に毒にならぬ人で有たにア
 、いとしゃ、南無阿彌陀佛皆回向
 してお茶參りませ、海鹿のおあへ此
 たんぼ、扱も味しと舌鼓、茶受に
 咄し噺交せて仇口、のやかましき
 皆船頭の習ひ乗合船の如くなり、ヤ
 アよい序じや權四郎さんお尋申す事
 がある、別の事でもない此悪さ駁連
 て順禮なさるゝまでは色黒に肥ふと
 りて年より脊も大がらに、病ひ氣な

けてほんの赤松走らかした様に門を
 家と遊びやるを見てはア、あやかり
 者じやと羨んだ子が何として又此様
 に色白に瘦けて思ひなしか顔のず
 まるもかはつて脊も低ふよは、と
 外へとては一寸出ずあれが順禮の寄
 特か觀音様の御利生かと、打寄ては
 是ざたマめんよな事やと、尋ればさ
 れば、其事のありや、前の榎松じ
 やござらぬ違ふた、其違ふた譯思
 ひ出すものふ恐ろしやマ、、聞て
 下され、コリヤ娘よ、何時の夜やら
 有たなハテ廿八日のヲ、それ、
 又後の月の廿八日三井寺の札を納め
 て大津の八丁に泊る夜、何かは知ず
 御上意じや捕た、と大勢の侍がコ
 レ見さしやれ咄しするさへ身が震ひ
 ます、ほんの世話にいふうろたへて

は子を逆さまどふ負ふやう娘が手を引たやら走つたやら、飛だやら漸々毒蛇の口を遁れ逃てゆく先は又、狐谷、谷の水音松吹く風も後から追手くる様に思はれ、扱も命は有ものかな、眞黒の夜に四里たらずの山道を息一つつかばこそ水一口呑ばこそ命からんく伏見へ出て初めて脊に負た子の顔見ればヤなむ三寶相宿の襖ごし背に咄もしたわろが、連た子と取違へたに極つた、大儀ながら一走り往て、もとくへ取かへて来てくれと娘はせがむ、ヲ、尤じやく取戻してこふと思ふ程先のこわさ、いかなく一足も行れるふつちやないわいの、今には限らぬ取かへす折が有ふ、先のわるも子を取違へ、人の子じやとてどろくへろくにはして置ぬ

管、ハテ此子さへ大事に育て置たら三十三所の觀世音のお力、ハテ枯たる木に花さへ咲じやないか、マ、一先内へ戻つて潰した肝をいやし、一先内へ戻つて潰した肝をいやし、中、乳吞ふと泣、持合せたを幸ひに娘が乳吞せたらそれなりに月日も立ち名も知ねど手付た榎松よくと言や我名と心得祖父よとく馴なじむ、いたくしき、今ではほんの榎松も同前にかはゆござると言聲も咽につまらす老心、娘も俱に涙ぐみ時の災難とは言ひながら縁有はこそ此子が手鹽にかゝり他人がましうもすることかかゝ様くと此乳を呑もすりや呑しもすれなじめば我子も同じ事此子憎いでは夢聊かなけれどもけふの亡者の手前も有、ならふ事な

ら、てつ取早ふもとくへ取戻したふござんすと、語るを聞いてと、娘達ヲ、それで疑ひ今啣たわいの大願立ての西國廻り現世未來の觀音様の引合せ、あつちからも榎松を連れてやが尋ねて見へましょぞいのふ、コレ必ずきなく思はぬがよいサア皆の衆餘りお茶吞でけつくおなかも盡さがりいざござれお暇と打連れ出る門の口權の先に笠かつ付打かたげ立歸る舞の松右衛門ホこりや皆お歸りかけふは前の舞殿の三年忌、内に居て俱々御馳走申す管を遁れぬ用事で罷り出で近頃の亭主ぶり、まそつと緩りとはなされいで、イヤモまそつとの段かいの、ゆるり鎌子の底たゝいて歸ります、コレ餘り茶には福がある、吞でお休みなされやと住家く

と立歸るハア親父様今歸りました、茶事の間に逢ふ釜の下でも焚ふと氣がせいでも相人はせかぬ大名のゆつたり、遅なはつた、嘸お草臥女房ども太儀であつたの、何の太儀な事はない、お前こそ嘸おひもじかるコレほんよ、と、様お歸りなされたかとなぜお傍へいきやらぬ、どりやまゝ上ふと立上る、アイヤ女房共、まだほしうない、望な時にこちらから言ふ、扱申し親父様、大名の中に梶原殿は取分の念者と申が違ひはない、お召に寄て船頭松右衛門、參上と奥へ言て行、やゝ暫くして御家老の彼番場の忠太殿がお出なされ、先達て指上た逆總の事書、一つ〱尋る程にける程に間殺した其上で其通申あきよ、暫く待よ暫くで有ふぞ、

なゝの三時待せておいて、殿が直にお逢なさるゝ是へお出なさるゝと其重々しき、物言のかたくろしき、船頭松右衛門とは儕よな、智謀軍術逞ましき義經へ此景時が能存せしと言逆艦の大事疎に聞請がたし、儕舟に逆艦を立ての軍訓練したる事や有、それ聞んと問かけられ、此度親父様に習ふて逆艦といふ事初て知た此松右衛門、返答にこまるまいか、申難儀せまいかほつとせしが、分別致しハ、御意ではござれ共、寶船の船頭ふせい軍といふものは夢に見た事もござらぬが、逆艦の事は我等が家に傳へよく存じて罷有まするなど、申て間に合をマ言たればムささも有なん然らば汝覺ある船頭をかたらひ今宵密に逆艦を立、舟のかけ引手練

して、其上に知せよ、事成就せば御大將の召舟の船頭は汝たるべし、御褒美は此梶原が取持ながく船頭の司として莫大の財寶を下さりよと有る直のお詞其嬉しきに初めの術なき打忘れあたふたと歸りがけ日吉丸の船頭之又六瀬吉の九郎作、明神丸の富藏こいらは、梶原様のお船の船頭、幸三人を相手にして日暮から逆艦の稽古に此方へ參る筈、御教へなされた手際を見せ付立身出世はたつた今、是と申すも御指南のおかけ忝い、コリヤ坊主よ悦ぶ結構なべゝ着せて持遊びに飽せふぞよ、女房共、親父さん、たんと悦んで下されませと語る聲より聞嬉しき、イヤサ不器具なやつは千年萬年教へても埒ちや明ぬ、まんざら素人のわか様が

ふやら、攝州福島松右衛門子植松と書いた笈摺が縁になつて、ヤア、そんなら此方は大津の八丁で、又跡の月廿八日の夜の。アイお子様を取ちがへた者でござんす。道理で見た様な顔ぢやと思ふた事、是は夢か、現かいのう。およし悦こべ、植松を取違へた人じやとやい。此方からも行方尋ねて、もとへ取戻す筈なれど、何を證據に尋て行かう手が、りもなく、泣て斗かり居りました。其代りには取ちがへた其方の子供衆、兎の毛で突いた程も怪我させず、蟲腹一度痛ませず、娘が乳が澤山な故喰物はあしらひ斗り、乳一度あまさせず、ヲ、それよ、風一度ひかさばこそ、親子が大事にかけたに付けても、此方の息子めも、無御厄介お世

話であらう、よう泣れてきて下さつた、忝ないく、わるさよ、我内を忘れたか、何故這入らぬ、いや門にはござんせぬ、エ、連の衆が跡から連れてお出なさるゝか、無御厄介忝ないく、はて早う逢ひたいな、娘お禮を申しやいの。父様せわしない、此お禮がちやつきりちやつと、つい云ふて済む事かいな。申し此植松はなぜ遅い、お連の衆が門違はなされぬか。此植松はなぜ遅い。我子は如何に、孫は如何にと立ち替り入れかはり、門を覗いつ禮云ひつそいゝに悦ぶ親子が風情、お筆が胸に燒金さす、今更何と返答も、泣くも泣かれず差うつむき、暫らく詞もなかりしが、お願ひ申さで叶はぬ譯あつて、恥を包み面目を凌で尋ぬ參

りしが、さうお悦びなされては、氣がおくれて物が申されぬ、マア下にゐて下さんせと、涙ながらに押静め。改ためて申すもあぢきなき其夜の騒ぎ、手ばしから逃げ隠れなされた、お前方は巡禮の功德、此方は一人は病人なり、男とては有に甲斐なき年寄、逃るも隠れるも心に任せず取違いた其御子は、其夜にあへなくなり給ふと、聞て恠りとは、何故にとはいかにと、餘りの事に泣きもせず、仰天すること道理なれ。人の身の仇なりと、豫ては聞けど其夜の悲しきやうも、今日迄は存らへし、云譯ながらの物語、聞て恨を晴てたべ高うはいはれぬ事ながら、連の女中と申すは私の御主人、騒ぎに取違へしとは、思ひもよらぬ、若君は猶大

切と私がかき抱き、御病人の女中は親が手を引き、一度は旅籠屋の憂目は遅れ出たれども、追かくる武士の大勢、氣は焚喰と防いでも、何といふも老人の云ひがひなく討死し、若君は奪ひ取られ、氣も狂亂の様になつて、女中もほつたらかし、大事の若君取かへさんと馳け廻る、月なき夜半の葉隠れ、尋ね廻はる笹垣、薩サア爰にこそ若君は有れと、取上て見たれば、悲しやお首がまうなかつた。よくく見れば若君でない。證據は此笈指。騷の紛れに取違へしな扱は若君のお命に恙なかりけりと、一度は安堵せしが、替りを戻さねば取かへされぬ若君、もとくへ取戻す種になる、人の大事の子を殺し、何を替りに若君を取戻さう、悲しい、

事をしやつたと、夫を苦に病み、主君の女中も、其座で果敢なくなり給ひ、悲しみやら苦しみやら、私一人が脊たら負ふた身の因果、此笈指をしるべにて、尋ね参りしは、お果てなされたお子の事は諦めて、此方の若君を戻して下さるゝ様のお願ひ、大事にかけてお世話なされたと、物語聞くに付け、面目ないやら悲しいやら、あぢきなき身の上を、思ひやつてたべ親子御様と、かつばと伏して泣きければ、祖父は聲こそ立てねども、涙を老に嚙ませて、咽につまればむせ返り、身もうくやうに泣きければ、娘は心も亂るゝばかり、失しき笈指手に取つて。やれ槌松よ、かくなるは、夕べの夢にまざくと前の父様に抱れて、天王寺参りしや

と見たは、日こそ多けれ、父御の三年の祥月なり、命日のけふの日に便り聞く告てこそありつらん。夫とは知らぬ凡夫の淺ましき、今日は連れてくるか、明日は戻りやるかと、待つて計り居たものを、大な災難に逢つて、笈指に書たせんもない、是が何の二世安樂、巡禮も當てにはならぬ、觀音様も胸甲斐ない、恨めしや、なつかしや、あはれ此事が夢であつてくれかしたと、顔に當て抱きしめて聲をばかりに身を悶へし、前後不覺に泣むたる。娘はへまい、泣けば槌松が戻るか、世迷言云や、二度坊主めに逢はれるか、豫て愚痴など爺が呵るをどう聞てと、いふ詞に縋り付き。夫々かう申す、私も女子じやが、愚痴では濟まぬ、祖父様の被

仰る通り、いか程お敷なされた迎、
 榎松様のお歸りなさるといふではな
 し、再び逢るゝといふでなし、さつ
 ぱりと思し召し諦めて、此方の若君
 をお戻しなさつて下さつたら、ア、
 有難い忝けないと、悦ぶ私心がど
 こへ行かう、榎松様の未來の爲めに
 は、佛千體、寺千軒、千部萬部の經
 陀羅尼、千僧萬僧の供養なされたよ
 り。女子黙れ何の面の皮でがやゝ
 頤たゝく、恥を知れやい、我子を
 我育るには、少々怪我させても不
 調法があつても、親だけに濟めども
 人の子にはな、義理も有り、情もあ
 る。主君の、若君のおいやるから
 は、夫知らぬまんざらの賤しい人で
 もなささうな。此おれは、親代々揖
 柄を取て、其日暮の身なれども、お

天道様が正直、大事にかけて置たそ
 つちの子見せう。いや見せまい、見
 やつたら目玉がでんぐりかへらふぞ
 人の子をいたはるは、此方の子をい
 たはつて貰ふかはり、大抵大事にか
 けたと思ふかい。コリヤそんなら又
 なせ尋ねて來ぬと減す口ぬかさうが
 尋ねて往かうにも何もしるべの手が
 ムリはなし。其方には笈摺に所書が
 あり、今日は連てきて取かへるか、
 明日は連れてきて下さるか、逢ふた
 ら何んと禮云はふと、明ても暮ても
 待てばつかり。コレ此襖を見おれ、
 可愛いや榎松が下向に買うといふた
 を聞分ず、無理に買ふて三井寺さん
 がい、持て歩いて嬉しがつた。鬼の
 念佛に餓鬼げぼろ殿のあたまへ、梯
 子さいて月代その大津繪、蒔の花の

お山も買をらず、けぼろ殿の繪を買
 うたはあのやうに、髭の白髪になる
 まで、長生しをる瑞相鬼のやうに達
 者で、金持で世界の人を、餓鬼の様
 に這ひかゞましをらう吉左右じや。
 めでたく戻り居つて見をつたら、嘸
 悦ばうと貼つて置いて待たに、思へば
 梯子はげぼろ天窓の下り坂、鬼の傍
 に、はいつくば餓鬼になつてお念
 佛でたすかる様になりをつたか。思
 へば思ひ廻す程、身も世もあらぬ、
 よう大それた目に逢はせたなあ。そ
 れに何じや、思ひ諦めて若君を戻し
 て下され、町人でこそあれ孫が敵、
 首にして戻そうぞとつゝ立あがる。
 なる悲しやと取つてお筆を押し退け
 はね退け、納戸の障子さつと明れば
 こはいかに、松右衛門若君を小脇に

かい込、刀ぼつ込み力士立。お筆驚き。ヤアこな様は、あの樋口の。コリヤ〜女、ム、聞えた、最前歸りがけ下の樋の口で、ちらとみた女中よな。若君は身が手に入て氣遣ひなし、いふてよければ身が名乗る、合點か、必ず樋の口を樋口など、魚相いふまいぞと、目交ぜで知らせば打うなづき、しづまる女、聞ぬ祖父。松右衛門出かしたりな。先刻にからのもやくや、寝られはせまい、開たであらう。其方が爲にも子の敵、其小兒づたくに切刻んで、女子に渡せ。いや、さうはいたすまい。なぜ致すまい。サア夫は。サア夫はとはエ、水臭い言いでも知れた、儂が種を分けぬ榎松が、敵じやによつて致さぬな。その根性では祖父が儘にも

さしやせまい、まら破れかぶれじやおれが云ふやうにせぬからは、親でも子でもない。娘其處らを駈け廻つて、若者大勢呼んで来いと氣を急いたりやれ、待て女房、人を集むる迄もなし、親父様、どうあつても、樋松が敵、此子を存分になさるか。くどい〜。ハア、是非もなし、此上は我名を語り、仔細を明かして上の事と、若君をお筆に抱かせ上座に直し。権四郎頭が高い。天地に轟く鳴雷の如く、御姿は見ずとも定めて晋にも聞つらん、是こそ朝日將軍、義仲公の御公達駒若君、かく申す我は樋口次郎兼光よと、いふに親子は荒肝取られ、呆れ果たる斗なり。樋口お筆に打向ひ、扱々女のかひんく敷、跡々迄も御先途を見とどくる神

妙さ、山吹御前も思ひよらぬ御最後御身が父の隼人も敢へなく討死したりとな。力落しと思ひやる。それに付けても斯てある。樋口が身の上、無不審若君のためには、祖父ながら多田の藏人行家といふ、無道人を誅罰せよとの御意を受け、河内國へ出陣の跡、鎌倉勢を引受け、粟津の一戦誤りなき、御身をやみ〜と御生害遂げ給ひし、我君の御最期の鬱憤直ぐに馳け入り、ひと軍とは存せしかど、思へば重き主君の仇、術を以て範頼義經を討取り、亡君に手向奉らんと、此家に入舞し、逆鱗を云ひ立て早梶原に近附き、義經が乗船の船頭は松右衛門と事極る。追付け本意を遂る様になるにつき、此若君の御在所は何國、いかゞならせ給ふと

心苦しき折も折、最前よりの物語、障子越しに聞くに付け、見れば見る程面やつれ給へども、紛ひもなき駒若君。さては思ひ設す願はずして、所こそあれ、日こそあれ、其夜一所に泊り合せ、取かへられて助り給ふ若君は御運強く殺されし樋松は樋口が假の子と呼れ、御身代に立たるは、二心なき某が、忠臣の存念、天の冥慮に相叶ひ、血を分ぬ子が子となりて、忠義を立し其躰しき、何に類ひのあるべきぞ、是も誰が蔭親父様、子ならぬ我を子となされ、親ならぬ我を親とする樋松、恩もあり義理もあり、餘所外の子と取ちがへての敵ならば、そこは御勘忍なされうが、女房がよしにと申すとも、其敵安穩に置くべきか、親父様の御歎

き、我も不憫さは身に迫れども、相手に取れぬ主君の若君、弓矢取る身の上には、願ふてもなき御身代り、祖父親の名を上た樋松、其名を上たもとはといへば、私を子となされし親父様の御厚恩、千尋の海蘇迷廬の山、それさへ御恩になかへくらべがたけれど、まだ其上に大恩ある主君の若君、孫の敵とて祖父様に切らされうか、我手にかけて主殿しの悪名が取れふと、花は三芳野、人は武士、末世に残る名こそ恥かしけれ御立腹の数々、お歎の段々、申上ふ様はなけれども、親となり子となり夫婦となる其縁に、つながるゝ定り事と思召し諦めて、若君の御先途を見届け、まだ此上に私が、武士道を立てさせて下されば、生々、世々

の御厚恩、開分てたべ親父様と、身をへりくだり詞を崇め、忠義に凝つた樋口が風情、兼平、巴が願をふまへ、木曾に仕へし四天王、其隨一の武士と、世に名を取しも理りなり。権四郎はたと手を打て。そうじや、侍を子に持ば俺も侍、我子の主人は俺がためにも御主人。ハ、サア、御殿、お手上られい。船玉冥理二、度丸笹になつて、喝食する法も有れ、恨みも残らぬ悔みもせぬ、泣きもせぬ、娘精出して早う、又樋松を産で見せをれ。扱は御得心まるりしか。ハア、忝けなやと、互ひの心ほどけ合ひ、千里の灘の漂船、湊見付し如くにて、悦びあふこそ道理なり、お筆嬉しく若君を、樋口の次郎に手渡し、其處にかくれておはす

れば、此お子に氣遣ひなし、浮沈は世のならひ、わたしが妹此津の國に勤奉公すると聞く、それが行方も尋ねたし、大津で討れし親の敵、討て亡者へ手向たし、何やら彼やら事しけき、私が身の上早お暇と立上ればそう聞てとめるも不調法、エ、残念ながら我等の身分、力に成らうとも得申さぬ、お勝手にお出でなされ。舞殿はてもぎだらなせめて、二三日足休め。夫々父様のおつしやる通リかうお心が解け合へば、初何のかのと申した程結局名残あり ひらにと留てもとまらぬ氣、涙にくれく、若君を、頼まるゝの頼むのといふ中かいの本意を遂げて、又御出で。さらばくと門送り、見送る秋見かへる袖、お筆は別れ出てゆく。扱てく

武家に育た女中は格別、娘今からあれ見習へよ。こりや爰に七面倒な笈摺が有る、どこへなりとつと捨てしまへ、親父様夫は餘りな思召切り、せめて佛前へ直し、香花も取り、逆様な事ながら、御回向なさつて取さつしやれましよ。侍の親になつて、未練なと人が笑ひはせまいか。何の誰が笑ひましよ。ハア、嬉しや、有様は先刻にからそうしたかつた、娘納戸の持佛へ火を點せと、手に取上る笈摺の、千年も生そうと念ふたに、たつた三ツで南無阿彌陀佛、植松聖靈頓生菩提。舞殿ござれ、娘も来いと見れば見かはす顔と顔、俱に涙に暮の鐘、かうくとこそ聞へけれ。早約束の黃暮時、又六を先に立て、富藏、九郎作

三人連、門口から用捨なく。松右殿内にか、約束の通り参つたと高呼はり。ヲ、待つて罷をりますと、身輕に拵へ飛で出て、御大儀々々入つて煙草でも参らぬか。いや、大事の急ぎの御用、一と精出して跡での田葉粉、しつぱりと先づやりませうぞや。ヲ、ともかくもと、皆川岸に下り立て、つなげる船の渡海作、纜解き捨て飛乗り、ナフ松右殿、船で妻子を養ひながら恥かしいが、終に逆續といふ事は。ヲ、知ぬ管、何事も俺次第教てやる。サア九郎作と又六は、おも梶とり、梶の鱸籠を立た富藏是へお出なされ、俺がする様の鱸を立た、是皆の衆、此様は舳から、鱸へ向けて鱸を立る、是を逆續といふはいなう。惣じて陸

の戦ひは、敵も味方も馬上の働き、
 駆けんと思へば駆け、退かんと思へ
 ば引く事も、自由げに見ゆれ共、船
 といふ物は又格別、知つての通り汐
 に連れ、風に誘れ船拍子立て、押す
 時は、行く事も早けれど、乗戻さん
 と思ふ時は、おも梶とり梶の風波を
 考へ、取梶柄の手の内、船をぐるり
 と本の如く、押廻して漕戻す、それ
 さへさす汐、引汐にもぢかふて、船
 に過ちあるときは、八萬奈落の憂目
 を見いとし、可愛妻子に再び、逢は
 れぬじやないか。いかにもさうじや
 其愛目を見まいたための此逆鱗、サア
 其鱗の鱗を押たく、おつと心得、
 やつしつし、いゝやつしつし、三段
 斗り漕出す。サアから船を漕ぎ寄て
 追まくつて戦ふ時、謀ごとに乗らる

るか、敵に新手が加はるか、すは負
 軍と見るときは、船押廻す迄もなく
 これ此逆鱗押し立て、富藏合點か、
 合點じや、やつしつし、しゝ、
 やつしつし、元の所へ漕戻す、透を
 窺ひ富藏、九郎作、梶おつ取り、松
 右衛門が諸隊羅いて、打ち倒さんと
 左右より、はつしと打つ、心得たり
 と躍越へ、逸へひらりと飛び上れば
 三人續いて駆け上り。ヤア卑怯なり
 松右衛門、儕木曾が郎黨、樋口の次
 郎兼光といふ事、梶原殿能く御存じ
 なされ、逆鱗の稽古に事寄て、搦捕
 り連れと來れと我々に仰付られた。
 尋常に腕廻すか、打のめして繩かけ
 うか、腕を廻せと罵しつたり。樋口
 からくと打笑ひ、推量に違はぬ上
 は何をか包まん、朝日將軍義仲の御

内において、四天王の隨一と呼ばれた
 る樋口の次郎兼光、儕等ふぜいが搦
 とらんとは、眞汐付たる一番碇、蟻
 の引に異ならず。ならば手柄に搦て
 見よ、ヤレーやら臭い廣言、跡で云
 へと、權振り上げ、なぐり立るを事
 ともせずかひくゞつて、引たくり、
 先に進みし富藏が、頭微塵に打碎け
 ば、一人ではかなはぬぞ、二人かゝ
 つて手に餘らば、打ち殺せと立別れ
 はつしと打つ。さしつたりとひらく
 身に、權と權とは相打ちに、互の眉
 間あいたしこ、ためらふ隙につゝと
 入り、權引たくり捨たりける。組ん
 で捕らんとむりむざん、取付く二人
 を引寄せ、力に任せえいらんと
 踏くだく天窓の皿、微塵に碎け死ん
 でけり。さあ安からぬ若君の、一大

事何とせん、我身をいかにとためら
う腕に、ひつしと響く鐘太鼓、數百
人のおめく聲、こは如何に〜と驚
く中に心付き、屈竟の物見櫓、ござ
んなれとかけ上る門の松、顔にべつ
たり蜘蛛の集や、松葉の針であいた
して、目ざす斗りはくらからぬ、茂
る梢のおぼる月、四方をきつと見渡
せば、北は海老江長柄の地、東は川
崎天満村、南は津村三つの濱、西は
源氏の陣所々々、人ならぬ所もなく
天の魚がせる籜の光、扱は樋口を洩
すまじ、取逃さじとの手配りよな。
さもあれいかにと飛で下り、女房ど
も、親父様々々と呼び立る。イエ父
様は、納戸の壁をこぼつて、どつち
へやら行かしやんした。ヤア、壁こ
ぼつて失せたとは、ムウ讀めた、訴

人にうせしたな。財寶をむさぼつて訴
人する。豫のて氣質ではなけれども
樋松が仇を忘れかね、それで失せた
か。ハア樋口程の武士が、船玉の誓
言に、氣を奪はれ心を救し、飼犬に
手を喰はれたエ、口惜や無念やと、
拳を握り、齒を鳴らし、しほれぬ眼
に泣き涙、磨きたてたる鏡の面、水
をそ〜ぐが如くなり。お腹立は理は
りながら、父様に限つて、よもやそ
うではあるまいと、云ひなだむる折
こそあれ、組の捕手の腰明り、武威
かどやかす高提灯、畠山庄司重忠、
権四郎に案内させて見えければ、娘
はそれと見。父様恨めしいと云はせ
もあへず、訴人の恨、云ふな〜。
おれが訴人せいでも、松右衛門を樋
口の次郎とは、梶原殿が能く御存知

なされて、富藏や九郎作に、搦めと
らさうとなされたぢやないか。それ
斗ぢやない、四方八方を取かこんで
樋口が命は籠の鳥。何ぼ助うと思ふ
ても助からぬ、おれが秩父様へ訴人
したは、樋松めが事で、サア其樋松
が事を云ふて、松右衛門殿が腹立て
何の腹立る事がある、親子といふ名
につながられて、孫めが親と一所に、
あつち者になりをらうと悲しきに、
あれは樋口が子ではござりませぬ、
死だ前の舞殿の、ナ松右衛門が子で
ナ合點がいたか、ほんの親子でござ
らぬからは、訴人いたした代り、孫
めが命お助なされて下されと願うた
れば、段々開し召し分られ、天下晴
れて孫めが命は、ヲ、慮外ながら、
此祖父が助けた。それに何ぢや樋口

が腹立た。ヤイ儕が子でもない主君でもない、若君でもない大事の、おれが孫を一所に殺して侍が立つか。若い其大きな眼にも、祖父がくたく心の數々せ、見えまいぞ。恨めしいとぬかす儕らがけつく、祖父は恨めしいと、氣を急ぎ上てくもり聲よう訴人なされた、有難しとも過分とも、いはぬ詞は云ふ百倍、磨し涙にくれるが、ずつと立て重忠の、傍近く、天晴御邊が梶原ならば、太刀の目釘のつかん程、切死に死んずれども、粟津の軍妹巴が身の上まで、心ざしありしと聞く重忠殿、情に刃向ふ刃はなし、腹十文字にかき切て、首を御邊に參らすと、云はせも果す。ヤア、死首を取て手柄にする重忠ならず、逆も叶はぬと

覺悟あらば、尋常に繩かゝられよ。いや、運盡きて腹切るのは勇士の慣らひ、繩かゝれとは此樋口に、生恥かゝせん結構な、仁義ある重忠の詞とも覺へず。いやこれ樋口、木曾殿の御内に、四天王の隨一と呼ばれ亡君の仇を報はんため、權四郎が舞となつて、弓矢にまさる櫓權を取つて、大將の船をくつがへし、鑿しせんず謀、恐ろしう頼もしう、晋の豫讓は、主の智伯が仇を報せんと御邊が如く姿をやつし、敵裏子を覗らふ、其心ざしを深く感じ、着たる所の衣服をぬいで豫讓に與へ、其衣をきらせて彼が忠義を立てさせしは敵ながら、裏子が情、木曾殿叛逆ならざる事は、書置にあらはれ、御最後今さら悔むにかひなし。主人に科

なき樋口の次郎、まつたく恥をあたふるにあらず、忠臣武勇を惜しみ給ふ、大將義經の心を察し、重忠が繩かくると、すつと、寄つて樋口が腕捻ぢあぐれば、につこと笑ひ、關八州に隠れなき、勇力の重忠殿、力づくには劣らぬ樋口、とられし此腕もぎ放すは易けれど、智仁兼備の力には、及びもない事、相手になられずともかくも計らはれよと、弓手の腕を押し廻せば、ヤア愚か。忠義厚き樋口殿の力に、重忠が及ばんや大手の大將範頼公、搦手の大將義經公、兩大將の御仁政、文武二つの力を取て、縛むる此繩ぞとかくるもかゝるも勇者と勇者、仁義にからむ高手小手、繩付を引立させ。コリヤ女樋口殿の血こそ分けぬ、樋松とやら

んは大切な子ではないか、暇乞をと
 ありければ、およしは泣くく納戸
 に臥したる子を抱き上げ、コレなう
 暫し假初も、親子と云ひし此世の別
 れ、コレ顔見せてと差よすれば、ハ
 ツア榎松に暇乞とは、四相を悟る重
 忠の御情、爺の願ひを聞き分け給ひ
 助けおかるゝ恭なき、誰彼の情も忘
 れぬ。コレ榎松父といはずに暇乞。
 樋口く、樋口さらばと稚子の、誰
 がをしへねど呼子鳥、我は名残もお
 し鳥の、番が離るゝ愛き思ひ、やら
 んく〜と縋りつき、娘よ、泣くな、
 何ぼやらんく〜と商賣の、船頭で留
 ても留らぬ。ア、悲しや、たとへ死
 ても地獄へはやらん、極樂へやる弘
 誓の船頭、思ひ切つてやつてのけう
 船ウタ 汐の満干に此子が出来たと

孫が身の上案じるな、爺が預かりの
 んえい〜われが、かはりに大事に
 育てえいよほん、ほんほんに何た
 る因果ぞと、正体もなくどうと伏し
 涙にむせぶ腰折松、餘所の千歳は知
 らねども、我身につらき有爲無常、
 老はとどまり、若木はゆく、世は逆
 さまの逆鱗の松と、朽ぬ其名を願島
 に、枝葉を今に残しける。



創十立念 年周十興 松竹 家庭劇 二の替り

四月一日初日

初日五時より一回開演
 平日五時半より一回開演

第一 戀 愛 漫 才 一 幕
 茂林寺文福 作
 尾崎 金三 脚色

第二 良 人 の 貞 操 五 幕
 吉屋 信子 作 (大阪毎日新聞演習)
 茂林寺文福 脚色

第三 ババさん行状記 二 幕
 益田 甫 作
 山上 貞一 演出

第四 瞬 明 丸 本 舗 二 幕
 茂林寺文福 合 作
 館 直志 脚色

第五 朗かな花見風景 二 幕
 高須 文七 脚色

どうとんぼり

浪 花 座



鶴澤友次郎脚色 作曲
大楠公

櫻井驛訣別の段

櫻井驛訣別の段

楠 正成 (豊竹本相生太夫)

楠 正行 (豊竹本さの太夫)

遠見の武士 (豊竹駒尾太夫)

(鶴澤道可)

人形

楠多門兵衛正成 吉田榮三

楠庄五郎正行 吉田榮三郎

郎黨隼人 吉田文之助

郎黨大ぜい

楠正成が、千早城を棄て、金剛山に籠り味方の不利なるを見て覺悟を定め櫻井の驛で正行と訣別して湊川に向ふ、金剛山の正成の居城に残る奥方柏の前と息正行の許へ正成が湊川討死の注進にて正行は悲しさに持佛堂で父の記念菊水の短刀で切腹せんとす母はその不心得を誡める特に此段を鶴澤友次郎が脚色、作曲なし御尊覽に供します。

(床本) 櫻井驛訣別の段 (前)

三重へとどめけれ扱も楠多門兵衛正成智仁勇を兼備し死を善道に聞る勇

將こんどの合戦味方必定負軍討死の時極れりと本國へも立歸らず、すに五月十六日有合ふ手勢七百餘騎、馬物のぐをかややかし心の花も咲かへる櫻井の宿に着ける、かゝる所へ遠見の武士馳歸り、只今、河内より和子正行様御出候、と知らせになく庄五郎正行、隼人を伴の案内に馬上ゆたかに出來り、夫と見るより馬乗捨父が前に手をつかへ、お父上には御機嫌能お嬉しう存じます。京都よりの御書狀により、御見送りのため是迄參上致せしと、ゐんぎんに相述る正成、追愛着の是今生の別れかと怯む心を取直し、ヤア正行汝をさなくとも能聞をけ、忝くも我帝の勅定を蒙り命を敵の矢先にかけ身を戦場になげ打こと誓を取て名を残

さん爲にもあらず、又子孫の榮花を願ふにも有ず、朝敵を亡し國家安全の憂い慮を休め奉らんを義を重んずる斗なり、今度の合戦味方必定する負王法忽ち傾き御代を奪れ給わん事鏡に照すが如くなれば、我れ一つの謀を以て度々諫め申せども坊門の宰相、刑の理を勸め君用ひさせ給はねば力なく打ツ立ツたり、直に兵庫湊川へ向ひ父が一期の名残の軍華々しく戦ひ一戦に腹を切るべきぞ、おことは是より故郷に歸り父が最期と聞ならば彌身を全ふして廿にも餘る時金剛山を要害として勤王の同志を集め、住吉天王寺に打て出て賊徒を亡し君を御代に立參らせ父が憤りを散せん事、いかなる佛事孝養も是にはなどか勝るべき、今生にて汝

が顔見る事も是までぞ、必ず詞を忘るゝなど勇氣挽まぬけ取も恩愛父子の憂別れ泪をはらくとぞ流しける正行聞もあへず、口惜しき父の仰や楠正成が嫡子正行こそ負軍を考へ出陣もせざりしと世の嘲りに落ん事、屍の上の恥辱に候、殊に親の討死と思ひ定めし軍場を見捨るなや候べき、是非御供に連れられずは吾等一騎駆抜け楠河内の判官が嫡子帯刀正行生年十二歳と名乗てよき敵に駆け合せ、引組で刺違へ冥途の道の先駆と思ひ詰めたる正行、敵の旗をも見ぬ先に歸れとは恨めしや、幼くも戰場の妨げと有るならば只今此所にて腹切らん、介錯してたべ人々と芝の上にと居て聲も惜まず泣ければ、並居る軍兵感涙に鎧の袖をぞ

ぬらしける、正成も共に涙は先立どもわざと聲を荒らげ、ヤア弓取馬の家に生れて討死するが難うしきか、おことを年し月養育せしは父が最期の供せよとは育てぬぞよ、傳へ聞く獅々は生れて三ツ日の内親獅々是を千仞の崖の上より突落し其強弱を試すとかや、汝は今將に獅々の子なり櫻井は千仞の崖の上、河内は崖の底なり、汝崖の底に落されて成長を遂げ再び義旗を金剛山に翻せば、今日汝が兵庫に來り父と共に死するより其功は幾倍ぞや、斯してこそ庄五郎は父の子なり、汝勇士の櫛分備らば數萬の敵の鋒先の巖石も凌ぎて碎く獅々の勢ひ、泰平の御代とは取返せ、吉野初瀬の名木も老木は次第に枯れども、こぼるゝ種の色香を

持佛堂訓戒の段

切 竹本 文字 太夫

豊 澤 廣 助

人 形

母 久子 の 方 桐 竹 紋 十 郎

一 子 正 行 吉 田 榮 三 郎

楠 郎 黨 竹 童 丸 吉 田 玉 幸

楠 郎 黨 恩 地 左 近 吉 田 文 作

楠 郎 黨 和 田 五 郎 桐 竹 門 造

つぎ花の名高き山たかし、二葉の苗を
残すこそ岩ほとならん楠が、長き
世までの形見ぞと、腰に帯たる御刀
恭々しく押戴き、コレ此一刀は長く
も今帝より賜はりし菊作りの御太刀
是を汝に與ふる間今日以後此刀には
恐れ多くも大君の御稜威と父が魂の
宿れるものと心得て、大切に奉持せ
よと、正行が手に渡しサア、予も是
より出陣せん、汝も疾く河内に歸り
君に忠勤怠るなサ、云べき事も是
限りさらばと斗り馬を引寄ゆらり打
乗思ひ切たる心にも、ゆゑしき我子
の武者振りを見るも限りと目に腕き
儘に歎きの正行も親の教訓詮方も涙
押へて立上り手綱かいくり打乗て、
親子此世の別れの詞さらばとだにも
云ばこそ、互ひに胸を引返し東西に

別れしが振り返り、親は我子の身の
行衛子は又親の最後の未思ひ包みて
弓取の。泣ぬを今の泪とは餘所の袂
にせきかへる淡川へぞ。

(床本) 持佛堂訓戒の段 (後)

五丈源の秋の夕ア、星落て蜀都
荒たり夫は唐土古る事の例を遠く我
朝に、引て返らぬ弓取の習ひと云ど
いたましや楠判官正成の奥方久子の
前忠義の二字に恩愛をかへて、河内
の觀心寺に佗住居、兼て覺悟はしな
がらも夫の身の上いかゞぞと、心元
なき氣遣ひを問の襖の明く度に戰場
よりの便りかと胸とどろかす愛思ひ
おもひは同じ稚氣に嫡子帯刀正行は
一間を出てしとやかに母の前に手を
つかへ、申母上御残り惜しきは此度

の戦ひ父上の御件して花々しき初陣
と思ひし甲斐も情なや、櫻井の驛路
より命ながらへ故郷へ立歸れとの御
教訓、たつて願へば御勘當、行に行
かれず是非なくも立歸りしが淺まし
や、是ぞ最期の一戦と語り玉ひし父
上の、死出の軍サを餘所に見ておめ
く歸る口惜しさ、御推量下さりま
せといふに、こなたも打しほれ、ヲ
、遠は父の子程有るまだ十二歳の身
を以て父が先途を見届けたいと健
氣にもよふ云やつたなア、心の内の
せつなさは母もそなたと同じ事、去
ながら誠父御のお覺悟は我謀を大内
に用ひ玉わぬ故にも有らず、世を見
限つて潔く最期を遂しと聞へなば
軍慮に淺き公卿達も諫めを用ひたま
わんかと命を捨ての御奉公、爰の道

理を辨へて身を大切に成人して、楠
家二代の忠臣となつてたもと、我子
を諫め勵まして互ひに涙相懸す胸の
やるせぞせつなけれ、かゝる所へ竹
童丸湊川の戦場より早馬にて立歸り
草鞋ぬぐ間もせわしなく中院の玄關
に聲高く、奥方夫におわするや、奥
方様くと呼はる聲に久子の方、正
行供々走り寄、ヤアそなたは竹童丸
シテく味方の勝利はいかに、早く
語つて聞せよと詞せわしく問かけら
れ、竹童丸はつくくくとお二方の顔
打守り、チエ、是非もなき御運の未
お館様には兼てのお覺悟湊川原の朝
霧と消てはかなき、御有様、と聞よ
りはつと胸せまり泣じとすれどせき
上る涙は袖の露時雨、晴間は暫しな
かりけり、竹童やがて涙を拂ひ、ハ

、ア御心中察し奉る、去ながら我
君此度の御最期は古今無比の大忠臣
可矢の面目此上や候べき、其の日の
軍の次第をば一通り申上げん、扱も
去ンぬる廿五日五月晴晴る、東雲に
足利勢は三十萬騎、野にも山にも満
々々と和田の岨に押寄たり、味方は僅
か七百餘騎今日を名残り晴軍皆菊水
の旗の下と死するは安き湊川、名の
み生田を跡にみて、敵陣近くよりけ
れば、正成、正氏御兄弟馬の鼻づら
押並べ鎧踏張り大普上、楠判官正
成、曰く正氏はにあり、我と思はん
賊徒原駆け來つて勝負せよと云より
早くドツトおめいて攻入つたり、敵
は魚鱗の備へを立前後左右を取りこ
めど我君事共したまわず後の敵を踏
みかけ前の敵を切立難立鋭き太刀風

さしもの大軍あしらひ兼ね、矢種を惜まず指つめ引つめ射かくる征矢は雨霰、いかに味方は猛くとも多勢に無勢次第々に亡び失せ、残るは僅か七十餘騎、是までなりと御大將北の一方を打破り傍りの民家に入り玉ひ鎧をとけば御身には十一ヶ所の御手傷、正氏公を見返りて死しての後ニハと問給へば、申迄も候はず只七生まで人間に生れいで朝敵を亡さんと云もあへず御顔見合せ打笑給ひ、腹一文字にかき切つて遂にあへなく成給ふと、始終を聞て正行はわつと斗に泣居たる、ハ、其御歎きは御尤残る七十餘人の方々皆指違へ見事の最期某も死出の御伴と既に覺悟を致せし處、汝は生らへ此場を退き大切なる菊水の旗急ぎ國へ持歸り討死の

次第傳へよと御主君の確き御詞背き難く、惜しからぬ命をながらへたち歸つたる心の内、拵量下され、奥方様、と涙と俱に物語れば久子の方泣目を拭ひ、誠や忠臣は君有を知て身有を知らずと聞つるに悲しむは女の愚痴悔んで返らじ、只此上は頓生菩提ナニ竹童丸そなたも嗚や道中勞れ宿へ下がつて休息しや、自は佛間にて亡き人々のとひ吊ひ南無阿彌陀佛、く〜と唱名となへしづ〜と佛間へこそは入にける。御跡見送り竹童丸心有げにしほ〜と納戸へ入や入相の鐘も姿や五月雨のそらに一聲時鳥歸り來よとは聞ゆれど父は歸らぬ死出の旅、思へば無念、口惜しと身をふるわせて正行は恨の泪はら〜と聲を忍びて歎きしが、やがてむつく

と起き上り都の方を伏し拜みこなたへ直り諸肌ぬぎ父が形見の寶劍を押いたゞき〜抜けば玉ちる氷の刃、逆手にとつて兩眼とじあわや斯よと見へたる折しも、様子うかがふ母君はかけ寄て刀もぎとり涙と俱に聲ふるわせ、ヤア血迷ふたか正行、いかに幼ければとて十ヲにあまればおとなぞやなどさ程にも辨へなき、せんだんはふたばよりかんばしと云たとへも有り、正成が子ならずや、かる〜しく命を失ひ一つの世にか天皇さまを御代に立た父亡魂の本意をとぐるぞや、コレ此尊き菊水の御刀、父が是を譲られしは今日そなたに腹切れとの仰なりしか、思ひ見よ亡き父の兵庫へ向はれし其時櫻井の驛より、そなたを歸されし御心は國に有

つて一族郎黨を扶持し、成長の曉には朝敵を亡し帝の御代に復し奉れとの仰にはあらざりしか、親しく此母に語り聞かせし其方がいつの間に忘れしぞ、かゝる淺猿しき心にては逆も朝敵を亡す事は得叶わぬ、そなたは楠の根を打枯さうの所存なるか、今此場で自害して天下の爲には益もなし、幼とも楠正成が子六十餘州をおもに持ち大事の身とは思はぬか、エ、恨めしや情なや是に付ても正成殿今三年七世にながらへ、おことが十四十五にならばかくうきせわもせまいもの、はかなき浮世や淺ましやといさめくどきて泣給へばさしものにいさむ正行も母の歎きに亡父の顔を見見る心地して母のひざに抱付き聲も惜まず泣居たる親子の歎

きぞ哀なる、やゝ有て正行、ア、そふじや君の御爲父の仇、討ずば冥土の父上に何と云譯有べきぞ、只今の御教訓きつと忘れず身を謹み父が武略を受け繼いで義兵の旗上なすならば、たとへいか成大軍も只一息に踏破り怨敵尊氏兄弟が首とつて父が修羅の妄執を晴し申さん、心安かれ母上と義をかためたる正行が四條暖の合戦に美名を残すも此母が育かうとぞ知れけれ、ヲ、天晴れ健氣の其詞楠家の運も未ならず母も安堵致せしと心の雲も解晴て御悦びぞ限りなき斯る折しもこなたより恩地左近、和田五郎、衣紋りしく奥庭傳ひいで來り奥方に一禮なし、ハ、委細へあれにて承る遺は楠家の御嫡子生先芽出度存じ上る、去ながら勇有て智

本日 物名本
回三十五第

あしべし 隔

花十 二景

四月一日 午後六時

八時 八時 八時

第一景 第二景 第三景 第四景 第五景 第六景 第七景 第八景 第九景 第十景 第十一景 第十二景

- 第一景 紅梅 (大踊塵)
- 第二景 白梅 (長唄)
- 第三景 飛梅 (長唄)
- 第四景 藤梅 (長唄)
- 第五景 萩 (長唄)
- 第六景 百 (長唄)
- 第七景 山 (長唄)
- 第八景 柳 (長唄)
- 第九景 蘭 (長唄)
- 第十景 鼻 (長唄)
- 第十一景 雪 (義太夫)
- 第十二景 櫻 (長唄)

角座

どうとんぼり

なきハ大将の器にあらず今暫くは世を忍び時を待て旗上たまへ、必々血氣にはやり大義を誤り在るな、と詞を正し理を盡す實も楠家の重臣と世に頼母しき武士なり、久子の方かいて佛間に直せし御旗うや／＼しく携へ出、これぞ祖先左大臣橋ノ諸兄公より家に傳はる秘藏の御旗、今更めてそちに與ふる夢々汚する事なかれと、渡せば取て押戴き、コハ有難き御賜もの父が形見の此太刀と俱に我身の六陥三路、スハ合戦の時來らば家の重寶菊水の旗辰先に押立々々敵何萬騎寄するとも身命は國家に捧げ奉り只一戦に追散さん、ホ、ホ、ヲ適々いさまし、其時こそは、我々も亡君の吊ひ軍敵の大軍引受けて散ハ土に埋むとも名は青天に輝さ

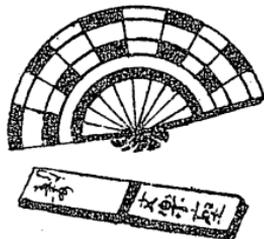


んヲ、正行とても其如く忠義の二字を頭に頂き花々しく軍サして末世の手本になすべしと詞はゆるがぬ武士の花咲春や三吉野に、二代の忠臣菊水の流れば世々に芳ばしき武勇の旗をぞなびかせり。

各種扇問屋

戸田商店

大阪市南區道頓堀
電話南⑦六九二番





合邦住家の段

合邦内の段

攝州合邦辻

豊竹富太夫 豊竹辰太夫 野千八太夫 豊澤園伊三 豊澤駒太夫 鶴澤清二郎

人形

親合邦 玉前房 奴入御 俊丸平 浅丸平 講姫大 手徳中 邦入中 合御中 邦女中 邦房中 吉田玉藏 吉田小兵吉 吉田文五郎 吉田紋玉市 桐竹紋太郎 吉田光之助 香徳大 手徳中

この『攝州合邦辻』は安永二年二月北堀江座の正本として菅專助、若竹笛射が合作したるもので、元禄七年竹本義太夫正本『弱法師』の改作であります。上下二段より成り、上の段は住吉で玉手御前が、俊徳丸に毒酒を進める所、高安館の僞勅使、俊徳丸國遠、繪旨取戻して下の段は天王寺西門閻魔王建立滑稽勸化、合邦内の段であります。書却し當時合邦内の段の切は豊竹此太夫が語つておますが、永らく上場を禁ぜられておましたので名作も世に出なかつた

のですが、その禁も解かれて大正十四年十月の御霊文楽座で初演しました。内容を申し上げますと、合邦の娘お辻は氏無くして玉の興、藤原通俊といふ公卿の奥方玉手御前と出世した。通俊には先妻腹の嫡子俊徳丸と外戚腹の次郎丸といふ二人の息がある。次郎丸は壺井平馬等と心を合せて俊徳丸をなきものにして家督を奪はんと計ります。玉手御前は義理ある子の俊徳丸に身も世もあらね無慮の横戀慕をします朝香姫といふ美しい許嫁があるので嫉妬して俊徳丸に毒酒をすゝめて業病にかゝらせます。俊徳丸は家出して天王寺の非人小屋に籠つたが朝香姫が訪ねてゆま手を

携へて合邦の家へ行くと其處で計ら
ずも玉手御前と落合ひます。合邦は
娘の不倫の戀を怒つて我が刃にかけ
ますと玉手は始めて眞實の底意をう
ち明けます。俊徳丸に戀慕と見せた
は計略で悪者等の爲に一命も危い俊
徳丸を助けやう爲であつたのです。

卑しい女から玉の輿に乗せられた
夫への報恩と繼子への義理立とであ
ります。玉手御前は寅の年月揃つた
女で、その臍腑の生血を絞つて飲ま
せると俊徳丸の業病も忽ち治るとい
ふ人口に噲炙された物語であります

(床本) 合邦内の段(中)

願以此功鐘鉦の音山が回向の申上百
萬遍の同行中座並上下の差別なく心
安居の岸はづれ合邦夫婦が志速夜

の料理そこへに氣輕手輕の給仕こ
そ心一ぱい馳走なり講中一番はしや
ぎ口せんべ屋の槌右衛門杉箸片手に
しやにかまへテ、奇特によふ勤めさ
つしやるの見れば新しい戒名も張て
有ど炬燵のやぐらやあぶりこの様な
角な字ばかりで一つも讀ねど此様に
味い事拵らへて講中を呼しやるから
はどふで身内の佛でござらふ誰じや
知らぬが頓生菩提と念佛に汁菜かみ
ませて蓮池のはぜやの婆イヤコレ合
邦殿志の佛が有と聞た故今夜の念
佛は我一と精出したでいつもとは夜
食も格別麥飯にとろゝじる飛龍頭の
平こんにやくの白あいではいかな亡
者もずるゝと極樂へすべり込しや
りゝ佛にならしやると言も馳走の
追従口主合邦取つくるひイヤモ今夜

の百萬遍はちつと廻ぬ亡者への手向
國を隔てくらす故命日も知らずそれ
で戒名も手作りで大入妙若大姉と付
て置た御存じもない佛に御苦勞をか
けまする即ち是が逆縁の成佛心ばか
りのほんの茶漬何もなくとも御酒三
献よふまいつて下されと夫が挨拶女
房は目には涙のふくみ聲久しう顔も
見ず死目にさへも得逢ぬむごい別せ
めて未來を佛にと御苦勞かけての百
萬遍よふこそ參つて下さりましたサ
アゝなるもならぬもかく三でと後
の盃めんゝにヲツト有ゝこぼる
と夫婦がしいぶん大分にコリヤた
べ過た満腹と膳は取れてもうつむい
て辭宜さへならぬ腹鹽梅いかい御雜
作御馳走と禮もそこゝ同行共皆打
連れて立歸る後に女房は御明しの灯

はかき立れど晴やらぬ子故の闇のく
どきごと天にも地にも一人の子やつ
ぱり道心者の娘で置たら非業の最期
もさすまいものなま中河内一國の大
名の奥様と言はしたは親の科五年六
年逢見ぬ親子病ひでも有事か苦しい
死をする時に嗚や親々戀しいと思ふ
たであら慕ひもせふ今は念に引き
れて未來も迷ふて居るで有可愛の者
やいぢらしやと身をひれ伏て泣かこ
つ合邦は尖り聲コレお婆エ、同じ事
をくり返し々々未練のじつくはい不
仕合せ故十年以來天窓は刺つても心
は昔の侍氣質一人の娘を高安殿へ
腰元奉公奥方に引上られても親有共
名乗らぬは斯いふ淺ましい姿故我子
の肩身もすぼろふと折ふしの状通に
も必々親の一門もない者と言ひまく

れとくどいほど言ふてやつたも娘の
影で立身望と世上に言るゝが面倒さ
潔白な親とは違ひ子と名の付た俊徳
様に無体な戀をしかけるのみか後迄
も慕ひ廻り大恩の夫を捨家出した徒
女郎其儘にして有ふか早速に追人を
かけ揺り殺しにかな成たて有无所存
をさげたやつ、子と思はねば不便に
もいぢらしうもなけれ共弔の百萬
遍は折々の賈の禮、又見ず知らずで
も劍の難で死だ者は弔ふてやるが天
窓の役そなたも武士の娘だてら見苦
しい泣顔と叱れば婆は猶涙可愛そふ
に其様にむごたらしうは言ぬものか
たわな子に不便をかけるは世上の赦
し、女は誰しもあるならひ徒者の不
義者のと叱るのは生てゐる中死だ後
じやちつとばかり可愛やと言ふ逆佛

のとがめも有まいと恨敷けば親爺も
心の底は子を思ふ敷きを見せじとか
ぶり振りア、イヤ、我子でも悪人
を不便と思ふは天道へ敵對坊主の役
と一旦は弔ふたれど畜生めが其戒名
引破つて仕廻ひなりとそこらの事は
そなた任せ抹香もきれたら盛なりと
御明しも消ぬやうに仕なりと勝手に
しやれ、おりや構はぬ、まんざらね
んごろな他人の死だやうにも思はぬ
故思はず涙がハ、ハ、ハ、ア、いや、
涙は出ねど年の科、此目がかすんで
〜とすり赤めたる恩愛の涙隠せど
悲しさは聲のくもりに現はれし夫の
心汲妻は手向の水の哀れげにせめて
未來の助にとくゆらす香のうす煙り
思ひは富士の高嶺とも思は清見がせ
きとめて涙押へる鉦の音。

(床本) 合邦内の段(切)

しんくたる夜の道、戀の道に
 は暗からね共、氣は鳥羽玉の玉手御
 前、俊徳丸の御行方、尋ねかねつゝ
 人目をも、忍び兼ねたる頬冠り、包
 みかくせし親里も、今は心の頼みに
 て、馴れし古郷の門の口、立寄る後
 より入平が、御兩所の御行衛、爰と
 は開けど奥方の、姿見るより様子も
 と、戸脇にあつき藪疊、身を潜めて
 そ窺ひ居る、かくとはしらで玉手御
 前、ひわれに洩るゝ細き聲、かゝ
 様、かゝ様と、呼ぶは慥に娘の聲、
 ヤア、わりやまだ死なぬか、殺さり
 やせぬかと、立上りしが心付き、振
 り返り見る女房の方、鉦に紛れて聞
 えぬは、ヤこれ幸ひと素知らぬ顔、

かゝ様、かゝ様爰明けてと、叩く戸
 の音聞き咎め、コレ合邦殿、今こな
 様何とぞ云ふてか、イヤ何共云やせ
 ぬそりや、空耳であるぞいの。イ、
 ヤ、空耳かは知らね共、ちらりと聞
 えた娘の聲、ハテ合點の行かぬと立
 上げるさう仰有るはかゝ様か、ち
 やつと明けてくださんせ、辻でござ
 んす戻りました、と聞いて恠り、ヤ
 ア、戻つたとは夢ではないか、
 まめであつたか嬉しやと、かけ出る
 裾を取つて引とめ、ヤイくくく狼
 狼者、肌はふれてもふれいでも、
 我子に不義をしかけた畜生、侍の
 身で高安殿が、助けおかしやる様な
 ければ、何の今迄存命で、うかか
 爰へ何にしにこうぞい、ア、隠すよ
 り顯はるゝはなし、親はないと云は

してもある事知つて、娘が手から度
 々の合力金、二人が命を養ふたは、
 皆高安殿の御厚恩。其夫の目をかす
 め、畜生の心さげた娘、譬へ無事で
 戻つたとて、門ばたも踏まされうか
 元來娘は斬られて死んだが、今もの
 言ふたが娘なれや、夫こそ幽霊、そ
 なた氣味が悪うはないか、肉縁の深
 い程、死人になれば恐いもの、必ら
 ず門の戸明けまいぞと、云ふに女房
 は、イヤくくく幽霊は愚か、狐狸
 の化けたのもま一度見たい娘が顔
 もしや恐ろしいものであつて、目を
 廻して死んだら仕合せ、いとし可愛
 い子を先立て、生きて業をさらそう
 より、一と目見たいと振切るを、猶
 引とめて、ハテ扱て悪い合點じやわ
 いの、狐狸か幽霊なればまだしも

もし誠の娘なら高安殿へ義理の言講以前は刀を差した役、親の手にかけ殺さずにやらぬ、それがいやさに留めるのぢやと泣かねど親の慈悲心を開く子や妻は内と外、顔と顔とは隔たれど、心の隔泣寄りの、眞身の誠ぞ哀れなる、娘は涙押し拭ひ、門の戸口に口を寄せ、とゞ様の腹立ち、憎しみは御尤これには段々言講あれど、人目を忍ぶ此身の上、マア爰明けて下さんせと、泣くく願へば母親は、アレ聞いてか合邦殿、言講があるといのママ開いてやつて下さんせ、ハテ娘と思へば義理もかける、幽霊を内へ入れるに、誰に遠慮もあるまいぞへ、アいかさまのう、此世をはなれた者なれば、世間を憚る事もないそんなら早う呼込んでソレ茶

漬でも手向てやりや、可愛や立寄る所はなし、幽霊も嘘ぞひだるかと、身を背けるは泣く百倍、母は悦び門口の、戸しやおそしと開く間も、おなつかしやなつかしや。と絶る娘の顔形、前後見つ肌に入れても矢張りほんの娘、嬉しやまめでゐたかいの。然とは知らいで逆様事あたいまゝしい百萬遍、甲ひした夜に無事な顔、ひよつと夢ではあるまいかと、抱きしめく嬉し泣き父もほどふる娘が顔、見たさに思はず立寄れど、以前の詞と世の義理を、思へばちやつと飛退いて、手持悪いぞいぢらしき、母は漸う心を鎮め、世間の噂にはの、そなたは、アノ俊徳様とやらに戀をして、館を抜けて出やつたの、イヤ不義ぢやのと悪

ふ云へど、そなたに限り、よもやさう云ふ事はあるまいの、嘘である。嘘かゝと箸持つてくゝめる様な母の慈悲。
面はゆげなる玉手御前 母さんのお詞なれどいかなる過去の因縁やら、俊徳様の御事はねた間も忘れず戀こがれ思ひあまつて打付にいふても親子の道を立て、つれない返事かたい程猶いやまさる戀の淵いつそ沈まばどこ迄もと後をしたふて歩はだし、あしの浦々難波がた身をつくしたる心根を不便と思ふて俱々に俊徳様の行衛を尋ね女夫にして下さんすが親のおじひと手を合ひ拜みまはれば母親も今更あきれ我子の顔たゞ打守るばかりなり。父はとかふの詞なく納所の内より昔の一腰引提出、ヤイ畜

生めおのれにはまだ咄さねど、もと
 おれが親は青砥左衛門藤綱といふて
 ナ鎌倉の最明寺時頼公に見出しにあ
 ふて天下の政道を預り武士の鑑と言
 はれた人、おれが代になつても親の
 かげ大名の數には入たれど、今の相
 模入道殿の世に成て佞人共に讒言し
 られ浪人して廿餘年世を見限つての
 捨坊子此形になつてもナ親の譲りの
 廉直を立通した合邦が子に、よふも
 〳〵おのれがやうな女の道も人の道
 もむちやくちやな娘を持たと思へば
 無念で身節も碎けるわい、又高安殿
 が今日迄うぬを助けて置つしやる御
 心底を推量するに、もとおのれは先
 奥方の腰元、後の奥方に引上ふと有
 た時、達て辭退しおつたを心の正直
 慾望で無理やりに奥方になり、ア、

手をかけず奥様とも言さずば此時宜
 にも及ぶまい、殺さばやならぬやう
 になつたも皆我業とお身の上を返り
 見て親への義理に助けて置しやるを
 エ有がたい恥かしいと、思ふ心がけ
 しほどでも有なら誓へどれ程惚てお
 つても思ひ切に切れぬといふ事はな
 いわい、それになんじや其さまにな
 つてもまだ俊徳様と女夫になりたい
 親の慈悲に尋てくれとはド、どのほ
 うげたでぬかした、エあつちから義
 理立て助け置つしやる程生けて置て
 はこつちも義理が立ぬ覺悟せいぶち
 放すと早抜きかける刀の鯉口、母は
 取り付コレ合邦殿コリヤ了簡が違ふ
 た〳〵おじひで助けて下さる娘、お
 志しを無足にして殺して義理が立ち
 ますかハテ此上は随分と意見して俊

徳様の事思ひ切し命のかはりに尼法
 師いかなる科の囚人も助るは衣の徳
 浮世を捨てれば死だも同然どこへの義
 理も立道理と興へ指ざし様々と宥め
 すかして母親は我子の膝に膝すり寄
 せ聞やる通りの様子なればどの様に
 思やつてもそなたの戀は叶はぬ程に
 ふつつりと思ひ諦めて、早ふ早ふ尼
 になつてたも、つゞや二十の年はい
 も器量發明勝れた娘、尼になれと勸
 めるはどんな心で有ぞいの、助たい
 ばつかりに花の盛りを捨させてかゝ
 れ迎しも黒髪は百筋千筋と撫しもの
 剃ねばならぬ此時儀は何の因果と許
 りにて絶り付て泣居たる娘は飛退き
 顔色かへエ、譯もない事いはしやん
 すなわしや尼になる事いやじや〳〵
 折角艶よふ梳んだ此髪がどふむごた

らしう剃れるもの、今迄の屋敷風はもう取置て是からは色町風随分はでに身を持って俊徳様に逢たらばあつちからも惚てもらふ氣、けがにも假にも尼の坊子と言ひ出して下さんとすと、けんもほろゝに取付ず、そふぬかしやモウ勘忍がと父が身構へ母親はヲ、道理でござんす〜腹の立は尤ぢやがモウ半時かしいて一時わしに預て下さんせ、手の裏を返すやうに思ひ切して見せませう、夫婦に我て長の年月たつた一度のわしが願ひ届届けて下されと、願へば是非も中の間へ見返りもせず行て親母はいぢばる娘の手引立〜むりやりに納戸へこそは入月の影さへ見へぬ目なし鳥、番ひ放れず浅首姫、一間の内より俊徳の御手を引て忍び出

今の様子を聞に付モウ暫くも此内にお前はどふも置まされぬ、何國へなりとお供せうと、手を引立てれば俊徳丸、我業満す母上に斯迄思はれ參らするも身の罪障とは言ながら館を出し頃には勝り兩眼しいたる其上に、かゝるけやけき姿をばお目にかければ母上の愛着心は切もやせん、案内せよ今一度御目にかゝつて其上に入平夫婦も尋ね來ば召連れ立退ると宣ふ聲を聞取門口ア、いや私めは先刻より始終の様子承はる、此所に御座有事里人の噂に聞ばもし敵方へもれては大事、一刻も早く御供せんと、氣をせく折しもかけ出る玉手、ナフかつかしや俊徳様お前に逢ふ許りにいくせの苦勞、物案じ、心をつくしたかひ有て、お健なお姿見んわいな

とすがり賜へば身をすりのけ、へエ、情ない母上様館にても申すごとく同氏さへも娶ぬは君子の禁め、まして親子の中々に戀の色のか程まで慕ひ賜ふは御身斗りか宿業深い俊徳にまだ〜罪を重ねよとか、見るめいぶせき此癩病兩眼しいて淺ましき姿はお目にかゝらぬかや是でもあいそがつきませぬか、コレ道も恥をも知賜へと涙と俱に恨むれどホ、お思な事をおつしやります、其お姿も私が業むさいともうるさいとも何の思はふ思やせぬ自ら故に難病に苦しみ賜ふと思ふほどいや増戀の種となり、一倍いとしうござんすわいなア、フウ此業病を、母上の業とおつしやる其仔細は、さればいな去年霜月住言で神酒と偽りコレ鮎で勤め

た酒は秘法の毒酒、癩病發する奇藥の力、中に隔をしかけの銚子、私か呑だは常の酒、お前のお顔を見にくうして淺香娘にあいそつかさせ我身の戀を叶へふ爲、前世の惡業消滅と家出有りはよい幸ひ、後を慕ふて知ぬ道、お行衛尋る其中心も君が筐と此盃肌身放さず抱しめていつか鮑の片思ひ、つれないわいなと御蔭に身を投伏てくどき泣、様子を聞て俊徳丸無念と思せど義理の親、恨も言はれず兎に角に我身の不運の御落涙、姫はいつそ涙も出ず腹立紛れ取て突退けエ、聞ば聞く程餘りじやわいなく玉をのべたお姿をよふあの様に仕やつたなふ、母御の身として子に戀慕、人間とは思はねど道ならぬ事も程がある、サア元のお顔にして返

しやと恨み餘つてはしたなき玉手はすつくと立上りヤア戀路の闇に迷ふた我身、道も法も聞く耳持たぬ、モウ此上は俊徳様いづくへなりと連退て戀の一念通さで置ふか邪魔しやつたら蹴殺すと、飛かゝつて俊徳の御手を取て引立てるア、ラ様らはしと、ふり切るを放れじやらじと追廻し、さゝへる姫を踏のけ蹴退けいかる目元は薄紅梅逆立つ髪は青柳の姿も亂るゝ嫉妬の亂行、門には入平身に冷汗、こらへかねてかけ出る合邦娘が誓引掴みぐつと指込氷の切先、あつと玉ぎる聲に驚り戸をめりくかけ込入平、驚く御夫婦、情なや母上を手にかけしかと御涙、娘をかゝへる母親は心からと言ひながらヲ、衛なかる苦しからと歎けば今更人々も

涙くを添にける、合邦は怒りの顔色、筋骨立て、ヤア皆何の爲に其の涙、ナ、何ほへるのぢや、女房共われ泣ては左衛門様や俊徳様御夫婦へ心の義理が立まいがな、此様な念の入た大惡人をまだおのりや子じやと思ふか、おりやもふく憎ふてくどふもかうもたまらぬわい十年以來蚤一疋殺さぬ手で現在の子を殺すも浮世の義理とは言ひながら、是が坊主の有ふ事かいくコリヤヤイコリヤおのれ計りか此親まで佛の教を背かしむ無限地獄の釜こげにようしをつたなア魔王めと抉る拳を手負は押へテ、道理でござんす道理じやく憎い筈じやが是には深い様子の事ある事物語るうち此刀必ず抜て下さんすなと苦しき息をほつとつぎ様

誕生したる女の肝の臓の生血を取り
 毒酒を盛たる器にて病人に與へる時
 は卽座に本腹疑ひなしと聞た時の其
 嬉しさ、それで、此盃身に添持
 て御行衛尋ねさがす心の割符と、様
 何と疑ひは晴まして、ムんすかヘライ
 ヤヤ、そんなら何かそちが生
 れ月日が妙薬に合た故一旦は癩病に
 してお命助け、又身を捨て本腹さそ
 ふと夫で毒酒を進ぜたな、アイ、ヘ
 エ出かしおつた出かした、娘、コ
 リヤやい娘モ、何にも言はぬ堪
 忍してくれ、日本は扱置、唐にも
 天竺にも今一人とくらべる人もない
 貞女を畜生の悪人のと憎て口いふ計
 りか親の手にかけむごい最期もコ、
 此おれがぐどんなからぢや、あほう
 なからぢや、赦してくれとどふと居

て悔み涙を道理なる始終を聞いて俊徳
 丸探り寄て繼母の手を取押戴き、
 なさぬ中の義を重んじ御身を捨ての
 御慈愛、誠の親共命の親共言にもつ
 きぬ御厚恩身を千百に砕くとも何と
 報じつくすべき有難や忝けなやと頭
 を疊に付け賜へば其お心と露知ら
 ず勿体ない道知らずとさげしんだの
 が恐ろしいお赦しなされて下さりま
 せと両手を合す姫の詔、適女の鑑
 とも言う、お身に悪名付かゝる御最
 後いたはしやと姫入平も悲歎の涙、
 母は正体涙にくれほんにこの子が生
 れたは寅の年寅の月寅の日寅の刻、
 世間へ沙汰をせぬ物と世の教をば大
 事ぞと夫婦親子の其外は犬猫にさへ
 隠したに義理にせまれば我と我身を
 責はたる無常の虎ひよんな月日に生

れたは持て生れた不運かと歎けば道
 理と一座の涙、あふ坂増井の名水に
 龍骨車かけし如くなり、手負は顔を
 ふり上げてサア、と、様コレ此鳩
 尾を切りさいて肝の臓の生血を取此
 鮑で早ふく、と氣をいる娘、エ、憎
 いと思ふた張り合ひなりやこそ切も
 突もなつたもの今では眞底可愛い娘
 をどふマアそれが、むごたらしい、
 ヤ若役じや入平殿とやら大儀ながら
 たのみます、是は又迷惑千萬、主人
 の介抱お世話のお禮どんな御用も相
 勤ふが御主人同然の玉子様どこへ双
 が當られませう、こればつかりは御
 免、エ、未練な用捨もふ人頼みに
 は及ばぬと、懐劍逆手に取直せばマ
 、、待てくれ娘とても生ぬそちが
 命、臨終正念未來成佛々力頼む百萬

遍此人數でくる珠數の輪の中で往生
 せいと取々廣げる珠數の輪の中に玉
 手は氣丈の身構へ俊徳丸を膝元へ右
 に懐劍左に一盃、外には爺の親粒が
 導師の役と鉦撞木母は涙の目も明か
 ず背は死だと思ひ子が回向の爲の百
 萬遍、今又無事なと悦んだも露と消
 行く進めの念佛、南無阿彌陀佛

くくくくくく内には難なく切さ
 く鳩尾自身に血汐うけたる盃、指
 付る手もわな／＼俊徳丸は押戴
 き母の賜、天地にも餘るばかりの御
 芳志と只一口に吞干賜へば不思議や
 忽ち兩眼開け面白手足もまたよく中
 昔の姿に歸り、咲花の顔見る手負苦
 しき片頬に笑ひ顔ヤア御本腹かと一
 座の悦び早断末魔の四苦八苦、鉦も
 早めて責念佛なまいだ／＼／＼

願以此功德平等に死骸に取付き
 纏り付、悲しみ涙霽け涙、庭に波
 打つばかりなり、歎きの中に母親は
 頭の雪をうちかはらひ、娘が菩提の尼
 衣、俊徳君も涙をとどめ廣大無邊繼
 母の恩せめて少しは報ずる爲出世の
 後は此邊に一字の寺院を建立し母の
 尼公を住侶とせん繼母は貞女の鑑と
 も爰らぬ心は清み江に月を宿せし操
 を直ぐに月光寺と號くべしと仰せし
 も尼寺と常念佛の鉦の音に昔の哀や
 残るらん、父は常々勸進の自力他力
 に此佛体建立して我住家を其儘一つ
 の辻堂に營むも又平等利益東門中心
 極樂へ娘を往生なし賜へと願ふ心は
 後世の爲、現世の名残數々は百八煩
 惱夢さめて涅槃の岸に浮む瀬と筐に
 残る盃の逆様事も善知識佛法最初の
 大王寺西門通り一筋に玉手の水や合
 邦が辻と古跡をとどめけり。

春の大芝居 百爛花の漫華陣

四月一日初日

毎日午後四時開幕
 初日二日目は三時

遊開朝日新年特別號所載

西川春郎脚色並原作

藤井亞木良装置

番目田 舍 侍 三幕

山口岬平 齋伯装置

花柳芳 次郎 振附

中幕二 月 堂 竹本演中

龍岡の巻 常磐津連中

あやめ池の巻

安川金我作 山口岬平齋伯

大西利夫演出 装置並衣裳考案

二番目 おつま八郎兵衛 二幕

皆羽菊藏振附

松田種次装置

大切 寄戀 買釣 罷

道頓堀

當津津中

中座



戀飛脚大和往來

新口村の段

(床本) 新口村の段

果の雪道を避れて死出の門に立つ情
炎紅蓮の好箇の世話物。

新口村の段

竹本源太夫
野澤吉彌

人形

傾城梅川	桐竹紋十郎
龜屋忠兵衛	吉田玉幸
忠三の女房	吉田文作
樋口ノ水右衛門	吉田多三郎
鶴掛藤治兵衛	吉田飄壽呂
傳がば	吉田文之助
針立の道庵	吉田玉七
置頭の巾	吉田小兵吉
親孫右衛門	吉田玉次郎
八右衛門	吉田萬次郎
捕手小頭	吉田玉丸
捕手	大田玉丸

この淨瑠璃は正徳元年竹本座の初演
と傳へられてゐます。大阪淡路町の
飛脚宿龜屋の養子忠兵衛が新町の樋
屋の梅川に馴染み、金に窮して苦心
を重ねる、新町の揚屋で友達の八右
衛門が忠兵衛の蔭口を言ふを聞いて前
後なく、忠兵衛はさるお屋敷へ届け
る爲替金の封印を切り梅川を身受け
して今日に迫つた身の破滅、共に遁
れてくれと扉を出る、梅川を連れて
死出の旅路にたゞ一と目と大和新口
村の親里へ立寄りしが茲にも捕手の
追つて、苦しき親子の生別、横る因

詞節季候だいく、だいくは節季
候、おめでたいは節季候。通らしや
れく、親方衆と違ふて、ごちとら
は水吞百姓、こなた衆にやる米はな
いわいの。とつごどに云はれ、詞こ
りやひどい。如何様貫ふ節季候より
内の様子はせく候と、云ぬれば女房
は杀ぐるま、正月迄は休まうと、納
戸へ取込みおうへの塵、掃出す表へ
詞てい古手買紙屑、お内儀様紙屑は
ないかな、オ、いやな人ぢやわいの
京や大阪と違ふて、在所に紙屑はな
い物ぢや、勝手しらぬ人ぢやそう
な町へ出て買わつしやれ、阿呆な人と

笑はれて、つぶやきながら見過し、
く、歸る程なく同行二人、ふだら
くや岸打波は三熊野の、那智のおや
まの詮議とは、人目にそれと白木綿
禪衣かけて順禮姿、お嬢様、火を一
つ借つしやりませ、處は何といふ所
かな、爰は大和の新口村、煙草の火
は出しませぬ手の内も法度でござん
す、ア、けんどんな在所だなど家内
をきよろしくねめ廻し、次の村へと
出てゆく、詞ほんに今日程うさんら
しい者のたんとくる日はない、納戸
這入りもなるまい、ドリヤタ飯のこ
しらへと、籠の前に差かゝる、落人
の爲かや今は冬かれて、すゝき尾花
はなけれ共、世を忍ぶ身の後や前、
人目を包む頬かぶり、隠せど色香梅
川が、馴ぬ旅路を忠兵衛が、痛はる

身さへ雪風に、凍える手先懐に、
あたゝめられつ温めつ、石原道を足
曳の、大和は爰ぞ古郷の、新口村に
着きけるが、詞コレ爰は、わしが生
の在所、四五丁行けば實の親孫右衛
殿の所なれど、不通といひ繼母なり
殊に今の身の上を、お目にかけるは
大きな不孝、此わらぶきは忠三郎と
いふて、親達の家來も同然、マア
く爰へと門の口、詞忠三郎殿内にか
ア、久しう逢ませぬとつゝと這入れ
ば女房は、詞ア、こちのは今庄屋殿
へどこからござんして何の用、わし
や敷除の次郎兵衛後家の媒酌で、近
頃爰へ來た故、前方の近付は知り
ませぬが、もし大阪の衆ぢやないか
いな、こちの親方孫右衛門様の息子
殿、大阪へ養子に行つてけいせいと

やらいふ物を澤山買ふて、人の金を
盗み、其の傾城を手にきかけて、走つ
たとやらすべつたとやらで、代官所
からきつい詮議、孫右衛門様は久離
切つて、お上のお構ひなけれども、
血を分けた親子なれば、いとしや年
寄つてきつい案じ、こちの人も馴染
故、もしこのあたりうるたへて、見
付ければさしやれぬかと、いかい
氣苦勞、庄屋殿から呼には來る、ヤ
寄合ぢや印判ぢやと、節季師走に爰
らあたりは、傾せい事でにえかへる
ア、うたてや傾せいやとしらねば遠
慮もなかりけり。二人はハツと胸に
釘、打點頭で成程く、詞大阪でも
其の評判、わしらは女夫づれで、年
籠の參宮、懐かしさに寄ましたが、
立ながらあふて行にたい、大阪者と

云はずに、ちよつと呼んで来て下さ
れぬか。オ、夫は安い事、一かへり
行つてきませうが、京のお寺が鎌田
村の道場へお下り、先からすぐに参
られるもしれまい、夫ではよつほど
わしが戻りも遅い、コレ女中様、飯
がしかけて有る程に、出来損なはぬ
様に、差くべて下さんせやと障外し
て出て行く。後は門口はたとしめ、
繫金かけてうつとりと、暫し詞もな
かりしが、詞コレ忠兵衛様、ほんに
爰は劍の中、斯うして居ても大事な
いかへ。ア、いや、男氣な忠
三郎、頼んで今夜は爰に泊り、死ぬ
る共故郷の土、生の母の墓所、いつ
しよにうづまれそなたにも、嫁姑
と引合せ、未來の對面さしたいと、
おろく、涙梅川も、それは嬉しうご

ざんせう。去ながら、私がと、様か
ゝ様は、京の六條珠數屋町、定めて
此間詮議に合ふて居さんせう、かゝ
様は眩暈持、若も事は有るまいか
と我身のうへより案ぜられ、今一度
京の両親に、一目あふて死たうござ
んす。詞オ、道理ぢや、わしも
そなたの親達に、筆ぢやといふて逢
ましたし、恩の有る養子親、妙閑様
や言號のおすはへも不埒の託、そな
たの兄忠兵衛殿の、志も無にした
断り今一度しみく、あひたいと、人
目なければなきじやくる。わたしも
たんと恩の有る、兄さんが猶戀しい
と、互ひに手を取り抱き合ひ、涙の
あらはらくと、袖にあまつて窓
を打つ、詞ハア雪が降さうなど、奥
の間は西受の、反古障子を細目に

明け、見ゆる野風の鼻道、うしろし
ぶきの吹雪にはかたがて急ぐ阿彌陀
傘、道場参りぞつとぎける、詞ヤレ
ありや皆在所の知つた衆、先なは樋
の口の水右衛門、ひどい存人ぢやぞ
い、其次は荷持瘤の傳が婆、こりや
又村一番の茶飲ぢや、そこへ入来る
置頭巾は大貧乏であつたが、年貢に
詰つて娘を京の島原へ賣つて、よい
客に請出され、金持の奥様に成つて
筆の蔭で田も五丁、藏も二ヶ所の俄
分限、同じ女郎受出しても、わしは
そなたの親達に、憂目をかけるが、
口惜いわいの。エ、愚痴な。モシそ
んな事云て下さんすな、アの親
仁は弦かけの藤兵衛、八十八で一
升の、飯を残さぬ達者もの、今年は
てうど錢百ぢや、其後に仔細らしい

坊主は、鐵立の道庵、あいつが鉈で
母者人を立殺した、思へば親の
敵。ア、もうよいわいな、今腹たて
ても何の役にも立たぬ事。ア、アレ
、あそこへ見えるが親父様、此
世のわかれ御暇乞、せめて餘所乍ら
お顔なりと、拜まうと、はるくくと
愛迄来た念願が叶ふたか、ア、有が
たいくくくくく、あの緋子の
肩衣が、孫右衛門様かいな、ほんに
親子は争そはれぬ、目元から鼻筋か
ら、お前によく似た事わいな。詞サ
ア夫程よう似た親と子が、詞さへも
得かはさぬは、何とした身の因果、
詞ア、お年も寄り足元も弱つて、是
が今生のおいとま乞でござりますと
手を合すれば梅川は、今がお顔の見
初の見納め、詞私は嫁でござんす

夫婦は今をもしれぬ命、百年の御壽
命過ぎて後、未來で孝行いたしまし
よと口の内にて獨語、夫婦諸共手を
合せ、兔かく涙にむせび居る。孫右
衛門は老足の、休みく門を過ぎ、
野口の溝の薄氷、すべるを留る高足
駄、鼻緒は切れて横様に、どうと轉
べば南無三と、忠兵衛もがけど出ら
れぬ身、梅川あはて走り出で、抱起
して裾絞リ。詞申しくく、どこ
もいたみは致しませぬかへ、お年寄
のあぶない事、お足も洗ひはな緒も
上げて上ませう、マアくこちへと
手を引いて、内に伴ひ揚り口、腰膝
撫ていたれば、孫右衛門は氣の毒
さ、詞ア、戴きますく、どなたか
知らぬが忝ない、お蔭で怪我も致
しませなんだ、ア、若い女中のおや

さしい、年寄と思し召て、嫁御もな
らぬ御介抱、もうく手を洗はしや
つてくださりませ、幸ひ庭に薬は澤
山鼻緒はわしがすげますと、懐搜
して取出す塵紙、ア申し、爰によい
紙がござんす、小擦捻つて上ましょ
と、延べ紙引さく其手元不思議さう
に打守り、詞此邊に見馴ぬ女中、
マアこな様は、此様に、何誰なれば
懇ろにして下さりますと、顔つれ
くと眺むれば、梅川いと胸つぼ
らしく、詞ハイ私は旅の者、私の舅
の親父様、丁度お前の年配で、恰好
も生寫し、外の人にする奉公とは、
さらくもつて存じませぬ、お年寄
に舅御の、臥惱みのだきかへ、孝
行は嫁の役、御用に立つて嬉しい物
詞嘸連合は飛立つ様にござりましょ

其紙と此紙とかへて、私が申し請、連合の肌つれあひに付けさせて、爺御おやごに似た親父おやぢ様の筐かたろにさせたらうござんすと、塵紙袖ちりぢりそでにおし包む、涙なみだにそれとはしられけり。詞ことばの端はしに孫右衛門まごえもん、扱あつかはさうかと思愛おんあいの、盡ぬ涙なみだを押隠おしかくし、詞フウこなたの舅しよとに、此親父このおやぢが似たといふこの孝行かうかうが、エ嬉うれしうござるが腹はらが立ちます、わしも年としだけの件せがれめを、様やう子し有あつて久離切きりきりり、大阪おおさかへ養子ようしにやつたが、傾城けいせいといふ魔まがさして、人の金かねを盗ぬすんだとやら、あげくに所ところを走はしつた噂うはさ。此大和このやまとは生國せいこくなれば、十七軒じちしちけんの飛脚屋ひやくやくや仲間なまなま、お上かみからも隠かくし目付めつけ、或あるひは順禮じゆんらい古手買ふるてかひ、節季せいき候まごに迄身まをやつし、此在所このまじは詮議せんぎ最中さいちゆう、誰故たれゆゑなれば其傾城そのけいせいの嫁御故よめごゆゑ、近頃ちかごろ愚痴うちな事ことなれど、世よのたとへに

といふ通とほり盗ぬすする子こは憎にくうなうて、繩なはかける人が恨にくめしいとは此事このこと、詞ことば久離切きりきりつた親子おやこなれば、よからうが惡わるからうが、構かまはぬ事こととは思おもへ共とも、大阪おおさかへ養子ようしに行いつて、利發りはつで器用きゆうで身みをもつて、身代しんたいもよう仕上しあげた、あの様やうな子こを勘當かんどうした、親おやは大きな白痴ばか者と、指差ゆびさせられ笑わらはれたら、其嬉うれしさはどう有あう。詞ことば今いまにもついで搜さがし出だされ、繩なはかゝつて引ひくゝ時とき、孫右衛門まごえもんは目水昌めみずあきら、よう勘當かんどうした出でかしたと、響ひびられるのが悲かなしうござる、それと思おもへば、一日いちにちも早はやう往生かうじやうをおすくひと拜願おがねがふは今いままゐる如ごとく様やう、御開山ごかいざん、コレマ佛ほとけに嘘うそがつかれうかと、どうとひれ伏ふしもだへ泣なき梅川うめがわも聲こゑを上げ、忠兵衛ちゆうべゑは障子せぢより手先てまゐを出だし伏拜ふせがみ、身みをもみ敷なくぞ

道理どうりなる、猶なほも涙なみだを押拭おしぬひ、詞ことば様やう子し聞きいたか聞きかぬかしらぬが、子こを釣つ出ださうとお上の計はからひ、養やうひ親おやの妙めづ閑殿かんぜん、一昨いちさく日牢にちらうへ入いれたげな。エ、と夫婦ふうふは氣きもうるゝ、それでつく思おもふには實じつの親おやを便たたりにして、もしも忍しのんで來きはせまいか、來きたらば何なんぼう不ふ便べんでも、養やう子し親おやへの義理ぎり有あれば、かくまふ事ことは扱あつか置いて、親おやが繩なはかけ出ださねばならぬ、あゝどうぞ來きてくれねばよいが、爰こゝらあたりをまごつきはせまいかと、四年よんねん以來いらい逢あはず、なつかしい子の顔かほを、見みぬ様やうに〜と、雜行ざつぎやうながら神かみたゞきも不ふ便べんきから、ア、とはいふ物の若死わかしにするせ人の一生いせい、義理ぎり有ある親おやを牢らうへ入いれ、おめ〜と逃にげ隠かくれは、末世まうせ末代まくだい不ふ孝かうの惡名あくめい、所詮しよせん逃にげれぬ命いのちなら

一日なりと妙閑殿を、早う牢から出すのが孝行、覺悟極めて名乗つて出しシタがそれもどうぞ、親の目にかゝらぬ所で繩にかゝつてくれ、エ、現在血を分けた子に、早う死ねと教へるも浮世の義理か是非もなや、何故前方に内證で、斯々した傾城に、斯うした譯で金が入ると、傳言でもしをつたら、久離切つても親子ぢや物、隠居の田地を賣立ても、首繩はかけまいに、皆あいつが心から、其の身もせまい苦しをつて、いとしほなげに嫁御に迄、思ひも寄らぬ愛目を見せ、知音近附親に迄、隠れる様に、身を持ちなし、ろくな死方せぬ様に、此親はうみつけぬ、エ、憎いやつぢやと思へども、かわゆうござると泣しづみ、わけたる血筋ぞ哀

なる。涙の際に巾着より金一包取出し、詞是は京の御本寺様へ、上げやうと思ふた金なれど、嫁と思ふてやるではない、只今のお禮の爲め是を路銀にちつとなと、遠い所へ往て下されと、渡せば梅川押いたゞき、詞お心付いた此お金、逆様乍ら歎きます、大阪を立退ても、私が妾目に立てば、借竹輿に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し廿日餘りに四拾兩、つかい果して二分残る、金故大事の忠兵衛様、科人にしたも私から、嘸憎からうお腹も立うが因果づくつと諦めてお赦しなされて下さりませ、親子は一世の縁とやら、此世の別れにたつた一目、逢ふて進せて下さんせと、奥の障子を明けるを引留め、詞ア、コレ益体も

ない、たつた今もいふ通り、誓詞はかはさいでも、顔見合したりや繩かけるか、おれが口から訴人せにや、養ひ親への義理が立ぬ、何ぼ義理が立たい迄、親の手づからどう繩がかけれうぞいの、御尤でござります、そんなら顔を見ぬ様にと傍に有合手拭取り、泣々後に立迫り慮外乍らとめんない千鳥、御不自由にはあらうが斯うさへすれば、傍にござつても構はあるまい。オ、オ、忝うござる、忝うござる、物云はずと顔見すと、手先へなと障つたらそちが本望逢た心、親子一世の暇乞必ずこなたの連合に、物いはして下さるなど、悦ぶ中に忠兵衛は、嬉しさ餘り馳出で、互に手と手を取かはせど、互に親共我子共、云はずい

はれぬ世の義理は、涙湧出る水上に
 身を浮く計りに泣かこつ、折から開
 ける多くの人音、二人は奥へとつき
 やり、詞コレ、女中、あの物
 音は徳に捕人、此裏道の小河を渡り
 藪をぬければ御所街道、早うくと
 氣をもむ所へ順禮すがたの八右衛門
 利平もともに蚤取眼、役人大勢打つ
 れ立ち、詞此内がきぶさいなと、ど
 かくくと込入る所へ、粗子一人
 かけ來り、詞所は長谷の山つときに
 梅川忠兵衛と名乗る者、休みおつた
 を追つ取まき、からめとらんといた
 せ共、中々手に合ひ申さずと聞くよ
 り小領扱こそく、來たれ続けと引
 かへせば二人、俱に飛んで行く、孫
 右衛門は飛び立つ嬉しさ、天の助け
 かたじけないと、裏道見やつて延あ

がり、詞オ、さうぢや、其道ぢや
 ソレ其藪をくぐるなら、切株で足つ
 くなと、肩かぬ聲も子を思ふ、平沙
 の善知烏血のなみだ、永き親子の別
 れには、安かたならでやすき氣も涙
 々の三重
 M 浮世なり。



劇 郎 五 家 迺 我 曾

幕 閉 時 四 日 初 日 一
 幕 閉 時 五 日 毎 日 初 日 一

① 根のない爭議

一 幕

② 純情紅白餅

二 幕

③ 二人のアルバム

二 幕

④ 無軌道の戀

一 幕

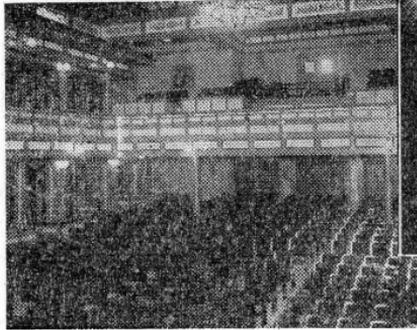
⑤ 鼻の六兵衛

二 幕

日曜・祭日

マチネー（正午開幕）

大阪歌舞伎座



文樂座御使用について

當文樂座は休演中諸種の御催物のため御使用に應じます。

例へば演劇公演、音樂會、舞踊公演お浚ひ温習會披露會、祝賀會、慰安會などには最も相應しい華やかなステージで、場内殆んどが座り心地良き椅子席、明るい照明等で冷風暖房完備に防音装置の近代的設備明朗な喫煙、御休憩室など至極豊かに、御來場の際しても大阪の中央四ツ橋畔に位置なし交通の便は申分なく最も適當な會場と存じます。何卒御利用の程御願ひ申上ます。

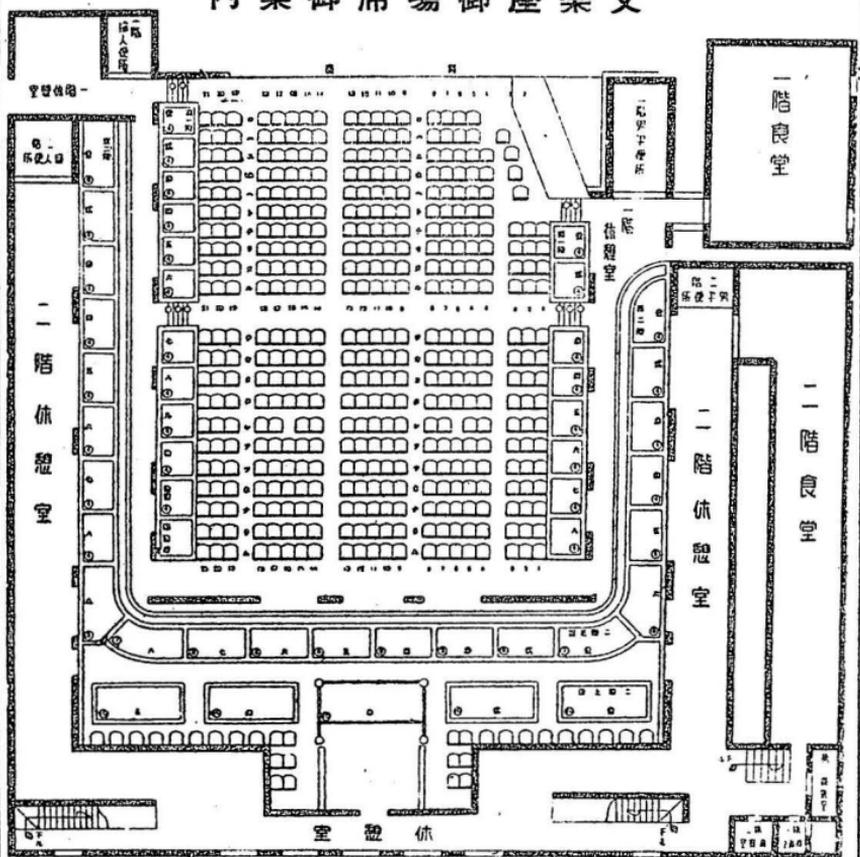
尙詳細の御使用については當座事務所にて御問ひ合せ下さい。充分御便宜御相談申上ます。

四ツ橋畔

文樂座

電南④四七一一番

文樂座御席場御案内



御覽料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になつて居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出来、
 またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は
 五日前から發賣致します、ま
 た五日以後のお切符も壹等席
 に限り御豫約申し上げますか
 ら上圖の座席表に依つてお早
 く御望みの御席席をお申し込
 みになればお心のまゝにお好
 きな處が御自由にとれます御
 用命の節お呼出しの電話は
 南四七一番で御座ります

切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります

二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します

毎度御愛顧を蒙り厚く御禮申上ます

本日は有難う御座りました。開場毎に皆様にご満足して頂けるやう、賜期待に反かね様一同努力致して居ります。

文楽座御使用に就て

當座を各種の御催し、例へば演劇公演、音楽會、舞踊公演、お浸ひ温習會、披露會、祝賀會、慰安會に御利用下さる様御願ひ申上ます。

諸種の團體御觀劇會

は直接御申込み下さいます様御電話にて御一報下されば早速係員を差遣し凡ての御相談申上ます。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店は

二階東側と一階兩側及休憩所に御座ります。お菓子、番附雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座ります。

お化粧とお手洗

一階と二階に御座ります。一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へ御預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。

歸りは混雑致しますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し。

致します黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひ

ます。

お場席券は 各自にお持ち下さい、切符に一枚づ、番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないうやうにお願ひいたします

案内人へ 其他の一般従業員に不行届の點は御遠慮なく事務所まで御注意の程お願ひいたします。

場内にて 寫眞撮影は絶対にお断りいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座りますから御使用下さい。ムシタオルはレットローション使用。

大阪市内區久左衛門町八番地
編者 松竹株式會社大阪支店
編輯 烏江鏡也

四ツ橋 文樂座

營業主任

昭和十二年三月廿八日印刷
昭和十二年四月一日發行

大阪市内區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市内區久左衛門町八番地
編者 松竹株式會社大阪支店
編輯 烏江鏡也

大阪市内區久左衛門町一丁目十二番地
印刷所 永井日英堂印刷所 金十五錢

文樂座南一食堂

御食の用は一幕前に御下賜はば至極御便利で御座います



大阪で一番早起きの南一

南一温泉料理

大阪四ツ橋

御宴會にも
御家族連にも
料理は
南一

文樂座南一食堂

電話南 ①五
三三三七
三三三〇
四二一一
番番番番

一部金十五錢